

「野岸孝子さんが失踪した原因は難しいけど、何となく彼女の意識に子供達への執着心が働いているような気がするな。少ししたら、一緒に花巻に行こうか。うまくいけば野岸孝子さんを戻せるかも知れない」

「ええ、わたしもそんな気がするわ。でもゆきさん、お父さんのこと何も書いてないわね」

「あまり触れたくないんじゃないかな。俺が前にゆきさんの家に行った時、太郎君と信次君が不思議なボールを見せてくれたんだ。そのボールは失踪する前の日に孝子さんが、どこかの小父さんからもらったって言って、子供達へのみやげにと持って来たものなんだけど、ボールをくれた人がご主人に似ていたようなんだ。ご主人は会社の研究室に勤めていた静かな人だったようだ。孝子さんが子ども達に、あまりご主人の話をしなかったことも少し引っ掛かるんだな」

そう言いながら賢はノートに書き込んだ。

No. 2 野岸孝子の消滅：ご亭主との関係で、一旦失いかけた？子供たちへの執着が戻って来ている。

「野岸孝子さんのケースはこれくらいにしておこう。次は竹下辰夫さんの場合だ」

「竹下辰夫さんについてはまだ分からないわね」

「そうだな、これは調べてからにした方がいいな。それじゃあ、いよいよ江川勝児さんの場合だ」

「大山はいろいろなことがあったわね。これは亜希子さんの意見も聞いた方がいいんじゃない」

「うん。だけど、何となく分かるような気もする。海の老人が絡んでいるしね。江川勝児さんは水泳の選手だったんで日々練習に励んでいたけど、スランプに落ち込んで、海の老人からアドバイスを受けて執着を断ち切って消えた。うん。そうすると、江川勝児さんの執着は水泳競技で勝つことかな」

No. 4 江川勝児の消滅：ムクウさんの指導で執着を断ち切る。水泳の競技大会で勝利することが執着となっていた。

「次は浮石康夫さんね。この方もまだ調べてないからはっきりしたこと

は分からないわね」

「そうだな、飛ばそう。次は中川愛子さんだ。帰還できて本当に良かった。これは俺が大体分かる」

No. 6 中川愛子の消滅：逃避的諦念で執着を失う。両親への恋慕が吸引する力となった。バレエや詩に興味がある。

「彼女はこれからどのように生きて行くか、いろいろ乗り越えなければならぬことが出て来るんじゃないかな。でも、頭のいい子だから、きっと大丈夫だろう」

祐子は無限の彼方を見つめて黙って居た。

「それから、天才原智明さんの場合だ。原智明さんのことは祐子が一番良く知っているんじゃないか？」

「うん、原智明さん自身に附いてはね。だけど消える前になぜ垂水に向かったのか分からないのよ。あなた確か海の老人から「彼は自由に別空間に移動することができるようになった」って聞いたって言ったでしょう？」

「うん、多分移動できるようにはなったが、戻って来れなくなったんだよ。だから……」

そう言いながら、賢はノートに書き込んだ。

No. 7 原智明のケース：自ら執着を断ち切り消滅。執着心が見えない。スーフィーダンスは執着に繋がるか？

「それから、あなたと亜希子さんの分も書かなくちゃね」

「そうだな。あの失踪からの帰還に、ヒントが一杯ありそうなものな」

No. 11 亜希子と賢のケース：ムクウさんによる吸引力で執着を失い消滅か？愛する者への執着が帰還への力となった。

「でも、身体が消滅するということはどういうことかしら？ただ見えなくなっただけじゃないわね。他のどの感覚でも感知できないから」

「俺たち人間は肉体の身体と、意識という見えない部分から構成されているのは分かるだろう。その肉体の身体が何をしているか考えたことあるか？これはまさに奇跡的なことなんだよ。肉体の構成要素は地球の構成要素と同じだ。地球そのものなんだ。少なくとも原子レベルではそう

なる。その身体に生命が吹き込まれて、呼吸をし、血液を循環させ、食物を消化する。奇跡以外に考えられない。そこには何らかの意志が働いていなくては説明できない。俺たちの肉体を顕現させている力が、その意志だと思う。その意志は俺たちの意識や心に身体を自由にさせないようにしているだろう。もし俺たちの意識や心が自分の身体を自由にコントロールできたら、俺たちは直ぐに死んでしまう。先ず、血液を一定の間隔で全身に送ること、繰り返し呼吸をすること、食べ物を消化し、必要な化学物質を作り、身体の各部分に送ること。こんなことを俺たちの意識や思考で行ったら、直ぐに疲弊してしまうから1日だって生きてられない。だから、俺たちを生かしている意志は俺たちの肉体を不随意筋を用いて、意識や心から切り離しているんだ。そんな俺たちの身体の状態を、身体の一部の脳が認識して意識に伝えている。つまり、目で見て、耳で聞いて、鼻で嗅いで、舌で味わって、皮膚で感じて、そこに自分の身体があると思うわけだ。だから身体が消えてしまうということは、脳が知覚できない状態になっているということだ。だけど意識だけは残っている。俺が消えていたとき、俺は自分の意識が働いていることが分かっていた。思考が無くなっているから言葉では説明できないけどね」

「ということは、消えた人は存在しなくなったんじゃないくて、他の人に認識されなくなったってことになるのね」

「多分そうだと思う。少なくとも俺が消滅していたときは、意識はあった。その意識の状態を思い出せないのが残念だが、多分、俺の意識と知覚と心が完全に一体になっていれば、失踪していたときの状態が説明できたと思うんだ」

「でも、土から出来ているわたくしたちの身体が認識されなくなっても、土に帰っていた訳じゃないんでしょう。どこに居たのかしら」

「たぶん、そのまま消えた場所にいたんじゃないかと思う」

「でも、あなたや亜希子さんはあまり遠くではないけれど、離れた場所に戻って来たでしょ」

「それは、そこで呼んだからだと思う。時間と空間は俺たちが考えるよ

うな固定的なものじゃなくて、意識によって、固定されたように見えているだけだと思う。だから、意識が決めつける内容を変えれば、その通りになるんじゃないかな。あの時は、お前が俺をあそこに呼ぶことを決めたんだよ。だから俺の身体はお前の意識で決められた様なもんだと思う」

「その辺のところは、わたしには全く理解できないけど、あのときは確かにわたしも、お母様もあなたと亜希子さんと呼び戻そうとした時、何の疑問も無く自分達の前に現れることを信じて念じていたわ」

「多分、そのことが俺たちが現れる時空間を定義したんだよ」

「もし、そうだとすると、一番執着の少ないように思える原智明さんは、やりようによってはどこにでも呼び戻せるかもしれないわね」

「うん、きっとそうだ。でも、俺たちはその前に先ずゆきさんの所に行ってみよう」

「分かったわ」

その時、インターホンの呼び鈴が鳴った。賢と祐子と一緒にインターホンのある壁のところに行った。インターホンの画面に亜希子が映っていた。賢が祐子に向かって言った。

「一寸、悪戯してみようか？」

「あなた、悪いわね」

賢はインターホンのボタンを押した。

「どちらさまですか？」

「お帰りなさい」

亜希子からの声が帰ってきた。亜希子が賢の悪戯を意に留めなかったので、賢はそれ以上悪ふざけは続けられなかった。

「亜希子さんか、祐子さんが来ているよ。上がって来いよ」

亜希子が入り口に現れた。賢と祐子は亜希子を出迎えた。祐子の姿を見て亜希子は驚いた。

「賢さん、お帰りなさい。あら祐子お姉さま、いついらっしゃったのですか？」

「昨日よ」

一瞬亜希子の顔面から血の気が引いた。

「まあ、中に入って」

「亜希子さん、今コーヒーを入れるわね」

亜希子は下唇を噛みしめて頷いた。賢はトラベルバッグから異なった包装紙で包まれた2つの紙包みを取り出すと、それを手にして、亜希子を促してソファーに座らせてから自分はその前に座った。祐子は3人分のコーヒーを入れて、盆に載せて居間のテーブルに持って来た。祐子はテーブルの端に盆を置いて、向かい合って座っている亜希子と賢それぞれの前にコーヒーを置くと、賢の隣にもう一つのコーヒーを置いて、その前に腰掛けた。亜希子は伏し目がちだ。

「これふたりにおみやげ」

「ありがとうございます」

亜希子はやっと口元を和らげて賢の方を見た。祐子の方には目を向けない。

「賢さん、ありがとう」

祐子も嬉しそうに包みを受け取った。祐子には小さい軽い包み、亜希子にはそれより少し厚めの重そうな包みだった。ふたりは包みを開けた。祐子は小冊子を取り出した。紀州民話の旅という名前の民話集で、古いものようだった。亜希子へのみやげは硯だった。

「祐子は、民話が好きだから紀州の民話集、亜希子さんは書道を^{たしな}嗜むから硯にしたんだ」

亜希子は嬉しそうに硯を手にとって眺めていたが、賢の方を向いて

「ありがとうございます。那智黒ですね。これとても良いつて聞きました」

と言った。祐子も小冊子を手にするると、ぱらぱらと捲って見てから、「賢さん、ありがとう。かなり古いものね。早速読んでみるわ。楽しみだわ」

と言って、賢に微笑み掛けた。

「土産物屋には売ってなかったんで、たまたまあった古書店で聞いたら、今は手に入りにくいものだと言っていたよ」

亜希子は賢がなぜ今、祐子に土産を渡すのだらうと疑問に感じたが、言葉にはしなかった。

「亜希子さん、今ね、賢さんと失踪事件の原因について話し合っていたのよ。あなたが居たら良かったんだけど。取りあえず賢さんがまとめたの。一寸ご覧になる？」

「はい、拝見させていただきます」

祐子は失踪事件調査ノートを手に取り、先ほどまで賢が書き付けていたページを広げて亜希子に渡した。

「失踪した人が、一番執着していたと思われるものと、失踪した時にそれをどうして消したのかということを一列記してみたんだ。気付いたことがあったら、言ってくれないか」

亜希子は暫く賢のまとめた箇条書きを見つめていたが、小さな声で話し始めた。

「わたくし、大山では失踪事件のことよく理解していませんでしたから、賢さんのお考えの通りだと思います。でも、鹿児島での出来事については、賢さんが皆さんに説明されたこととは少し違った感覚を持っています」

「えっ、そうなんだ。俺は自分の意識の変化を捉えられなかったけど、亜希子さんはどんな感覚だった？」

「わたくし、フェリーの上にいる時からの事が断片的にですが記憶に残っています」

「えっ、本当か？・・・確信が無かったから・・・言わなかった？」

「はい、そのとおりです。夢の中の出来事のような気がして、皆様を混乱させてはいけないと思いましたので黙っていました」

「と言うと、その時、自分の意識がどういう風に変化したか覚えているということ？」

「全部ではありませんが、ある程度は説明できます。本当に夢の中のようでした・・・フェリーに乗っていた時、急に強い力で引っ張られました。その力はとっても強くて、真っ暗な中を身体が、螺旋を描いて引き上げられてゆくような感じがしました。それから急に廻りが凄く明る

くなって、目が開いてられないほどになりました。暫くはどうなったか分かりませんでした。気が付いたとき、わたくしはとっても綺麗な草原に立っていました。それが夢の世界のようではなくて、本当の草原にいたと感じたほどです。草花が一面に広がっていて、時々ほんの僅かにそよぐ風に、大きく揺れたりしています。わたくしはその草原の中の1本道を暫く歩いて行きました。すると、1軒の小さなとても綺麗な家がありました。家の中に入ってみましたが誰も居なく、家具なども何も無くガランとしています。でも床も壁もとても美しく、今まで見たこともないような色で、まるで輝いているようでした。壁には大きな窓が附いていて、そこから草原と山々が見渡せます。わたくしはもう一度外に出て、暫くその家の前に立って庭一杯に咲いた花々を眺めていました。そこに賢さんが歩いて来ました。賢さんは自分がどうしてここに来たのか、自分が誰なのかも分からないと言っていました。わたくしたちはふたりで、その家で生活を始めました。不思議なことに、食事をしようと思うと、必要なキッチンウエアとその日に頂きたいと思っていた食事の材料がキッチンのテーブルに用意されるのです。食卓や食器類も自然に現れて、食事が済んで寛ぐ時になると、キッチンウエアやディナーテーブルが消えて、小さな二人掛けのソファーが現れました。わたくしたちはふたりでソファーに腰掛けて歌を歌ったり、立ち上がってダンスをしたりしました。そろそろ床に入ろうと思うと、自然にベッドが現れました。わたくしたちは結婚した訳ではありませんが、夫婦の様な生活をしていました。わたしが食事の支度をし、賢さんは近くの山に木の実を取りに行ったり、生活に必要な道具を作ったりしました。毎日同じような生活だったのですが、日々新しいと感じる不思議な生活でした。賢さんはよく、ご自分の思うように道具が出来ないと仰っていましたが、わたくしにはいつも、思っただけで必要なものが現れました。わたくしは誰か苦しんでいる人がいたら助けようと思っていましたが、沢山の動物には出会いましたが、一人の人にも会いませんでした。わたくしたちは、そう、3年間ぐらい生活したかしら、でも子供には恵まれませんでした。賢さんはとても優しく、わたくしはとっても幸せでした。わたくしは

賢さんをとっても尊敬していました。それは今でも変わりませんが、賢さんはわたくしを愛してくださっていたように思います。ある日、わたくしたちが小川の畔を散歩していると、いろいろな岩が並んでいる土手に出ました。その岩の一つが母にそっくりでした。賢さんにそのことを申し上げると、賢さんは、その岩が祐子お姉様にそっくりだとおっしゃいました。ふたりはその岩を眺めて佇んでいました。次第に、母のことが思い出されて来て、とっても会いたくなりました。するとまるで人を引っ張る磁石でも入っているようにその岩にどんどん引き付けられて、その後のことは良く覚えていません。気が付いたらわたくしは母の腕の中にいました。そして、賢さんは祐子お姉様の元にいらっしゃったのです。わたくしは何が何だか分からなくなって、ぼーっとしてしまいました。それから頭が痛くて……。あとは、皆さんがご存じのような……」

さっきまで明るく喜々としていた祐子の顔から微笑みが消えた。

「亜希子さん、3年間も賢さんと一緒に生活したの？」

「はい、でも、夢の中なんでしょうね」

「何とも言えないな。時空間は自分の意識で出来ると思われるからな。地球の重力や電磁力、それに量子的な力の影響下から外れると、時間と空間は意識の力で無限に拡大、縮小できるはずだ。意識の世界は今亜希子さんが言ったような、思いのままの世界のはずだからな」

「亜希子さん、賢さんとは同じ床で休んだの？」

「はい、でもいつもふたりが床に着くと、身体が無くなったような感じで、気が付くと朝になっていました。ですから、眠ったという感じもありませんでした」

祐子は亜希子が賢と夜の営みをしたのではないと思っほった。そしてそう思う自分を何となく恥ずかしく感じて、単なる嫉妬なのだと思っ返し、思考を止めた。漸く祐子の頬がゆるんだ。

「賢さんも同じ感覚だったの？」

「いや、さっきも言ったけど、俺は全く記憶に残ってないんだ。ただ、戻った時、祐子、君に強く呼ばれているということは感じた。今、亜希

子さんが言ったような美しい草原とか綺麗な家とか、亜希子さんと一緒に生活なんて記憶は全くない」

「亜希子さん、3年間病気なんかはしなかったの？」

「いいえ、何か変わったものを食べると時々お腹が痛くなったりしました。でも、「いたいいたい」と苦しんでいると、お腹から、「わたしは何でもないのよ」という言葉が聞こえてくるような気がして、どこも悪くないんだと思うと、途端に痛みが無くなりました」

「ふうん、不思議ね」

「もともと、夢の世界のようなものだったと思いますから」

「やはり、意識だけの世界に入っていたんだな。その時の肉体は意識から切り離されて、この世界から別の世界に行っていたことになるな。と言うより、意識がこの世界での肉体を認識しなくなったから、肉体が消えたと考えた方がいいのかも知れないけど。でも亜希子さん、やはりお母さんに引き付けられて戻って来たんだ」

「そうかも知れません。岩が母の顔に見えましたから、それもわたくしの意識が母を求めていたのでしょう。本当は、わたくしはあのまま賢さんと一緒にいる方が幸せだったのですが……」

「意識の世界の3年間がこの世界では1ヶ月だったのね」

「ふたりとも、法華經にある譬諭品第三ひゅほんを知っているかな？」

ふたりは首を横に振った。

「そこに、釈迦が舍利弗なに対して、「来世佛となりその号を華光如来といはん。華光佛の世にとどま住ることいのち寿十二小劫、その国の人民衆は寿命八小劫ならん」というくだりがあるけど、あれも意識の世界を表現している言葉だと思う。釈迦が時間の原理を認識していなかったはずはないからな。それを普通の人はそのまま解釈して1小劫はおよそ1、680万年だから華光佛のおられる時代の人民衆の寿命を14、400万年と考えると、不思議なことを言うかと思っているんだな。時間は相対的なものさ。亜希子さんと俺が過ごした3年間は意識の世界の3年間だよ。実際はどの時点でどれだけ時間が経過したかは分からない。あるいはその3年間はこの世界の1瞬だった可能性もある」

「難しいわよね、亜希子さん。一緒にお昼を作りましょう」

「はい、お姉様」

ふたりはソファを立ってキッチンに行き、スパゲティの材料を探し出した。亜希子がハムと肉、ピーマンを買って来ていた。ふたりは分担を決めてスパゲティとスープを作り始めた。手を動かしながら亜希子が言った。

「お姉様、どうしておひとりでこちらにいらしたのですか？わたくしも誘って頂きたかったわ。どうしても、賢さんに「お帰りなさい」って言いたかったの。本当はわたくしもこちらに来たかったの。でも、今日みなさんとお会いする約束だったでしょう、だから我慢したのよ」

「ごめんなさいね。わたし、我慢できなかったのよ」

亜希子は涙ぐんで黙ってしまった。それを祐子に覺られないように、下を向いて茹でているスパゲティを箸で掻き回した。昨夜のことは、もうそれ以上聞こうとしなかった。

三人は昼食を済ますと、今後の計画を相談した。賢は調査の続行よりも、失踪者の帰還への挑戦に軸足を移そうとしていた。賢の中にはある種の確信が出来上がっていた。三人は各地に出掛ける日程について話し合った。初めに遠野に行くことにし、その後で大山、大阪、青森、北海道と旅行することにした。税金など必要経費の支払いを考慮すると、賢の自由になる残金は既に210万円ほどにまで減ってきている。急ぐ必要があった。三人は旅行計画について相談を終えると外に出た。賢は2冊のノートと数馬と亮子へのみやげを持って出た。2時半までにはまだ30分以上あったが、そのままレストランに向かった。レストランはかなり混雑していた。奥の角のテーブルに既に数馬と亮子の姿があった。二人は6人掛けの半円テーブルの一番奥に並んで座っていた。数馬と亮子が寄り添って座っている様子は、恋人達のある情景を作り出していた。ふたりに気付いて祐子が言った。

「あら、数馬君と亮子さんもう来ているわよ。早いわね」

三人はウエイトレスに「連れが居る」と告げて、奥のテーブルに近付いた。

「早いじゃないか、ふたりでデートか？・・・はい、みやげ」

賢は数馬と亮子に同じような紙包みを渡した。

「おう、ありがとう。いつも悪いな」

「賢くん、ありがとう」

ふたりは早速包みを開けた。数馬には筆入れ、亮子には鮮やかな彩色の盆だった。賢が紀州漆器だと説明すると、ふたりはもう一度「ありがとう」と礼を言って、みやげを自分たちのバッグの上に置いた。

「みんなも早いな。今、亮子さんと一緒に食事を済ませたところだ。食事は済んだのか？」

「うん、俺たちもさっき済ませた。一寸お邪魔なようだけど一緒に座ってもいいか？」

亮子の顔が少し赤らんだ。

「勿論だ、待っていたところだ」

賢が数馬の隣に座ると、祐子は亮子の隣に座り、亜希子が最後に祐子の隣に座って、半円卓の両端に賢と亜希子が座る形になった。ウェイトレスが注文を取りに来た。三人はいずれもアメリカンコーヒーを頼んだ。

「数馬、今日は重大な話があるって言ってたろう。先ずその話から聞こうか」

「よし、じゃあ、その話から入るぞ。亮子、いいね」

亮子は下を向き加減に頷いた。頬が一層赤くなってきている。

「実は、俺と亮子は婚約した」

祐子と亜希子は喜々として祝福した。

「亮子、おめでとう」

「おめでとうございます」

「亮子、数馬、おめでとう。いつプロポーズしたんだ」

「1週間前だ」

「わたくしたちは薄々分かっていたわ。時々ここで会う時、亮子の様子が可笑しかったもの。なんかとても幸せそうで、いつもにこにこしてて。数馬君がいる時は特にね」

「ねえねえ、なんて言ってプロポーズしたの？」

「そんなことは、どうでもいいじゃないか」

「亮子、ねえ、なんて言われたのよ」

「うっ、うん、「一生俺と一緒にいてくれないか」って……」

「愛しているとかは言われなかったの？」

亮子は顔が真っ赤になった。数馬が恥ずかしそうに天井を向き、話を逸らそうとして、三人が数馬と亮子を見て微笑んでいるのに照れながら言った。

「2番目の重大発表があるんだ」

「一寸待て、式はいつだ？」

「うっ、うん。亮子と来年の5月頃にしようかって」

「そうか、俺たちも呼んでくれるよな」

「当たり前だろう。歌でも唱ってくれよ」

「よし、任せとけ、なあ、祐子、亜希子さん、一緒に踊りでも踊ろうか？」
三人は声を上げて笑った。周りの客が一斉に振り向いた。数馬と亮子は恥ずかしそうに目を伏せた。

「まあ、その話はこままでにして、第二の重大な話だが、例の原智明研究会だけど、所長が行方不明になったんだ。事務所が荒らされていて、保管してあった原智明関係の資料が全て盗まれてしまったんだ。それに所長の行方が分からなくなっているんだ。全国版のニュースでは報道されていないけど、一昨日、懇意にしている鹿児島取引先の仲間から電話があった。警察が原智明研究会のメンバーに事情聴取しているらしい。賢、おまえ会員になってなかったか？」

「なってる。おれも、祐子も亜希さんも正会員になった」

「そうか、もしかすると警察から調査が入るかも知れないぞ」

「分かった。それで、全部盗まれたのか？」

「少なくとも、書棚は空になっていたようだ。そっくり盗まれたようだ。他の家具類なんかは手を付けられていなかったけどな」

「まずいことになったな。誰が、何の目的で資料を盗んだかだ。悪いことに使われたら大変なことになる」

「まあ、そういう訳だから、注意しているよ。おまえ、原智明語録の内

容は知っているだろう。記録してあったら、盗まれないように保管しておけよ」

「分かった」

祐子は会話には加わらなかったが、事の重大さを認識していた。

「実はもう一つ大事な話がある。お前のことだ」

「俺のこと？失踪事件のことか？」

「いや、仕事の事だ。お前ももうそろそろ仕事に復帰することを考えてもいいんじゃないか？」

「うん。だけど、もう少し調査を進めたい。あと少しで失踪原因が解明できそうな気がするんだ。解明できたら、またこの社会で生きるよ」

「あと、どの位掛かりそうだ」

「俺は今年一杯か遅くとも来年の3月までには原理を解明したいと思っている。皆にも随分迷惑を掛けているし、もうこれ以上は我儘を通せないと思っているんだ」

祐子が嬉しそうに微笑んだ。亜希子は顔色を変えなかった。

「実はな、今俺たちが取り組んでいる例の大プロジェクトに、人間の精神作用と科学との関係に通じた人間が必要になっていて、ビジネスの観点からそれを見られる人物を捜しているんだ。よく考えてみたら、お前が最適だと思い付いたんだ。お前なら、今度のプロジェクトの目的としていることに精通しているし、営業や技術の経験もあるからドンピシャだと思うんだ。この話は実は、亜希子さんのお父さんから言われている、今度のプロジェクトを引っ張る人物として、お前の名前が出ているらしいんだ」

「えっ、そんな話は何も聞いてないぞ。それに、俺にそんな技量がある訳もないし」

「勿論お前一人にそんな重荷を負わせたりはしないさ。だけど、お前にとって絶好のチャンスだ。一度藤代社長に会ってみろよ」

「俺からそんなことをするのは失礼だ。もし本当に俺を使って頂けるなら、きっと藤代肇さんの会社から連絡があるだろうし」

今迄黙っていた亜希子が口を開いた。

「わたくし父に賢さんのことを聴かれました。でも、ビジネスというようなことじゃなくて、身体は健康かとか、人間関係を作るのが得意かとか、人を包み込むような包容力があるかとか、そう、それから、先端技術に興味があるかというようなことも聴かれました」

それを聴いて数馬が亜希子に訪ねた。

「それで、亜希子さん、何て応えたんですか？」

「わたくし、賢さんはとても健康で、力もあって、とても強い方だと応えました。それから人との交わりにおいては相手のことを第一に考えて行動するし、誰とでも親しくなってしまう。人に対してはとても優しく、労りの心があると応えました。先端技術は最も賢さんが好きな分野だと言ったら、父はうーむと唸っていました」

「そう、それでいいんです。俺も賢はそういう人間だと思うし」

「俺は、そんな人間じゃないよ。もっと俗物だよ。買い被っちゃ駄目だ。俺は皆が好きなだけだ」

祐子が賢を見つめて言った。

「賢くん、あなたそう言う人よ。誰でも認めるわ。優し過ぎるくらい優しいわ」

「いずれにしても、俺は失踪事件を解決しないことには、何もすることができない」

「うん、それは分かった。だけど早くケリを付けろよ。おれは待っているからな」

「分かったよ。それじゃあ、次に俺の報告を聞いてくれないか？」

賢は皆が興奮気味に話すことをさらりと躲すかのごとく言った。数馬は直ぐに賢の話の方向に舵を切った。

「うん、愛子さんのことだな。愛子さんが戻ったことがどれだけ意味を持つか分かるか？お前と亜希子さんが戻ってその結果、愛子さんを戻すことができたんだから、他の人たちを戻すことも可能だと思うんだが、そうだろう」

「うん、俺もそう思っている。これは祐子とふたりで検討したことだけど、どうやら失踪した人の意識の方向と執着心が鍵になりそうだ。失踪

した人が持っている、あるいは持っていた執着心の対象から強い吸引のエネルギーを発することで、失踪者はその対象のところに引き戻されるようだ。ほぼそう思って間違いなさそうだ。もともと、失踪した者の意識があまりこの世界から切り離されていないという条件が付くけどな」五人は夕方5時過ぎまでレストランにいた。話題は失踪事件から再び数馬と亮子の結婚の話に戻り、和気あいあいと談笑の時を過ごした。やがて、賢、祐子、亜希子の三人は数馬と亮子のふたりきりの時間を作る為という理由を付けて、ふたりと分かれることにした。レストランを出ると亜希子が言った。

「祐子お姉様、父が今日、賢さんを家にお連れする様にとっておりましたわ。賢さん、いらして頂けますか？」

「あら、そうなの？ さっきのお話かしら」

「分かった。じゃあ、兎に角一度部屋に戻って、それから何うよ」

三人は賢の部屋に戻った。そこで、賢は藤代肇と登紀子へのみやげの袋を用意した。祐子と亜希子も賢からのみやげと、自分たちの持ち物を持った。亜希子が祐子の持っている大きい袋に少し目を向けたが、何も言わなかった。それからおよそ40分後に賢は亜希子と祐子の後に附いて藤代家の門を潜った。賢は亜希子に案内されて応接間に入り、促されてソファーに腰掛けた。亜希子は部屋を出た。家政婦が小盆の上に湯飲み日本茶を持って来て「いらっしゃいませ」と言いながら賢の前と藤代肇が座るだろうと思われるソファーの前に置いた。少しして、藤代肇が姿を現した。

「やあ、帰って来たね」

応接間に入りながら藤代肇が言った。賢は立ち上がって頭を下げた。

「はい、昨日こちらに戻りました。これはささやかなものですが、とても気に入りましたのでおみやげにと思ひまして」

賢はそう言いながら、藤代肇に土産の包みを渡した。

「お心遣い頂いて申し訳ない。ありがたく頂戴します」

藤代はそう言いながら包みを受け取ると直ぐに開いた。2組の漆塗りの碗と箸のセットだった。

「紀州漆器だね。美しい。何よりの物です。妻も喜びます」

「喜んで頂けて恐縮です」

「紀州はいかがでしたか？」

「はい、幸い天候にも恵まれ、失踪者を帰還させることもできて、当初の目的以上の成果を達成することができました」

「それは良かった・・・ところで、お疲れのところわざわざお越し頂いたのは、君にお願いがあつてのことだ」

「はい、何でしょうか？」

「君の人生をわたしに委ねてくれないか？」

「えっ！それはどういう意味ですか？」

「わたしを信じて、そうしてもらいたいのだ。勿論、無条件ではない。まず、君が生きるのに必要な費用は全てわたしが持つし、当然、可能な限り君の安全は確保する。更に君には有能で忠実な人材を3名付ける。その内の二人の部下を通して、このビジネスの全容を把握し、目標達成に向けて注力して欲しい。もう一人は君の安全を確保する為に常に君を護衛する。そういう条件の下で、わたしに君自身の行動を全て委ねて欲しいのだ。ちょっと抽象的で奇異に聞こえるかも知れないが、これは人類存続の為だ」

「今、なんと仰いました？」

「人類存続の為に君に力を貸して欲しいのだ」

「は、はい・・・何をやるのかによって、回答させて頂きたいのですが」

「分かった。これから話す事は時が至るまで絶対、他言しないでほしい。どんな親しい人にもだ。実は今、地球が転換期に差し掛かっている。これは君もよく知っていることだろう。具体的に調べて見ると、地球の存続は人類の存続に関係しているらしいのだ。実はわたしは世界的組織の鉄屋と云われる秘密結社に属している。このことは妻も亜希子も知らない。この結社の目的は人類の救済だ。詳しいことは説明しないが、人類の生存形態が大きく転換されない限り、地球は存続できないということが判明したのだ。エコ程度のことでは済まないのだ。その鍵は人類の意識の変容にある。それは君がよく知っている　－　いや、実践して体験

しつつあることだ。と言うのは、今起きている失踪事件は、逆に地球の変容の影響で起きているようなのだ。今迄人間の失踪という事件は数え切れないほどあったが、いずれも神隠しなどと呼ばれ、原因が分からないままだった。その内、幾つかの失踪事件は地球の変容に関係していたと思うが、大半は無関係だったように思われる。しかし、最近起きている失踪事件の内、君たちが取り上げている8件は将に地球が変容する予兆なのだ。ところが、君によってこの間の鹿児島での帰還、そして、今回の和歌山での失踪者の奇跡的な帰還を実現したので、われわれは意志を決定した。われわれは最近、私情を挟むことをせずに君の行動を見守っていた。それで、君をこの計画の中核に置いて、人類の意識をその向かうべき方向に舵取りしてもらうのが最適だという結論に到達したのだ。わたしは見かけ上、財閥の頭首をしているが、それは国内の企業を動かす為と、財力で人を動かす為に必要だからだ。今回立ち上げようとしている国家プロジェクトはこれを実現する足懸かりにする為のプロジェクトだ。投資金額は総額で15兆円程度になる。国家から5兆円、企業から5兆円、国民から3兆円、然るべき筋からの寄付で2兆円を集める計画だ。これで足りるかどうか分からないが、これ以上は無理だろうということになった。このプロジェクトの当面の目的は日本国民の90%以上の意識を変容させることなのだ。勿論最終的には日本人だけではなく、地球上の全ての人間の内、1割の人の意識を変容させる必要があるのだ。この計画で実現しようとしている対象は地球全人口の僅か2パーセント足らずだが、日本が先頭を切って、これを実現すれば、他国の支部は間違いなく追随する。各国に最低1カ所はこの事業を推進する教育館を建てて、啓蒙を図る計画だ。上手くいった場合、日本が突出して理想に近い国家に変容するから、世界中の人間の意識は富士の裾野のように広がって変容してゆくはずだ。原理的にはルート1パーセントの意識の変容で全体が大きく変わって行くはずだが、我々はあらゆる施策を通して10パーセントで変容を図ろうとしている。この事業は大変なリスクを伴う。まず、利益追求を図っている組織からの攻撃だ。私欲を捨てて取り組む為、反対を唱える利益追求型の組織から、徹底的な妨

害が起きるはずだ。次は、ほとんどの参加企業がこのプロジェクトを通じて利益を得ようと図ることだ。必要以上に利益を上げさせてはならない。もう一つのリスクは思想的な抵抗だ。これが一番手強い。先ず学者の抵抗、宗教教団の反発、政治家の反発。数えたらきりが無い。当然、君がこの中心的人物になると、常に命が危険に晒される。それを承知でお願いしているのだが」

「お話を伺って驚きました。やはりあなたは唯の企業頭首でおられなかったのですね。折角お話頂いたのですが、わたくしはそんな巨大なプロジェクトを引っ張って行けるほどの力量も、能力もありません。それにまだ、失踪事件の原因を究明できておりません。確かに、この失踪事件の原因究明によって、人間の意識と他のものとの関係が明確になると期待しておりますが、この結論については、まだ何とも言えないと思います。わたくしは自分自身でこれを認識しなくてはならないと考えています。ですがもし、こんなレベルのわたくしでも受け入れてくださり、わたくしがこれを達成するまで、時間を頂けるのであれば、一つのことを除いてわたくしの残りの人生は全てあなたに委ねます」

「その一つとは？」

「はい、祐子さんのことです。わたくしは祐子さんと一生共に生きることに決めています。ですから、わたくしが祐子さんと共に生きることを認めてくださり、失踪事件の結論が出るまでの間、お待ち頂けるのであれば、ご説明頂いたような大それたことがわたくしにできるかどうか分かりませんが、ご提案を受け入れさせていただきます」

「君は亜希子のことを忘れていませんか？」

「亜希子さんはわたくしと共に苦しんでいる人々を救うということを目的に、共に生きたいと仰っています。ですから、わたくしも共に歩みたいし、彼女のことを敬愛していますが、わたくしは以前から祐子さんと約束しておりますので、正直どうしてよいか迷っています」

「いっそ、ふたりの女性と共に生きてみてはどうですか？本来なら、亜希子と祐子の両方の親であるわたしとしては、どちらか一人とあなたとを添わせたいのですが、どうやら亜希子の意志は動かないようです。こ

れから築こうとしている世界は結婚とか入籍というような枠もとりに
いますから、あなたが二人の女性と共に生きることができれば、何も問
題になりません。奇異に映るのは既成の規範に基づいて判断しているか
らに他ならないからです」

「こんな状況を作り出してしまったのは自分の優柔不断さが原因だと思
います。本当に済まないと思います」

「清水の舞台から飛び降りたつもりで、わたしの二人の娘をあなたに託
しましょう。神世の昔には大山祇神が木花咲耶姫神と岩長姫神の二人の
娘神を邇邇芸命に嫁がせたと謂う話があるでしょう。祐子と亜希子のど
ちらも岩長姫にしないで、二人を大切にしてくださるなら、わたしは喜
んで二人の娘をあなたに託します」

「本当にそれでよろしければご提案をお受けいたしたく思います。わた
くしの個としての生活は別として、人類救済の事業にわたくしを捧げま
す。失踪事件にけりがついたら、直ぐにこちらに参ります」

「承知してくれて本当に嬉しい。今日はみんなで酒宴を開こう。その時
に、わたしから皆に話をする。その場では君はわたしの話を全て肯定し
てくれ」

「はい、分かりました」

藤代肇は右手を出した。賢がそれに応じ、ふたりは硬く握手を交わした。
藤代肇は執事を呼んで、晚餐の支度をするように指示した。祐子と亜希
子が入って来た。ふたりはにこにこしている。賢と夕食を共にできるこ
とと、賢が仕事に復帰できそうなのを喜んでいる様子だった。少しして、
登紀子が入って来た。登紀子が賢に会うのは久しぶりではあったが、ま
るで1年も会っていないように登紀子には感じられた。藤代肇は賢から
のみやげを見せた。登紀子は碗を手を持って上に掲げたり回してみたり
してから、嬉しそうに漆の色彩と艶を褒めて賢に礼を言った。

晚餐の用意が出来た。藤代肇が執事や家政婦に席を外させ、全員を前に
話し始めた。

「今日は内観賢さんを迎えての祝賀会だ。乾杯の前に皆に話がある。こ
れは全ての人にとって記念すべきことだ。わたしの話を良く理解して、

納得して欲しい。これから、内観賢さんにはわたしの会社でわたしの直下のプロジェクトの責任者として働いてもらう。勿論、わたしの最も信頼している若手の部下を2名、専属秘書として付ける。このプロジェクトは国家秘密プロジェクトなので、決して他言してはならない。それが先ず1点目、次ぎにわたしたち家族として重大な事項を説明する。祐子と亜希子のふたりは内観賢さんと人生を共にして欲しいということだ」今まで微笑んでいた祐子と亜希子の顔が硬くなった。登紀子はその意味を解しかねているように狼狽の色を露わにした。

「親のわたしからは言いにくいことだが、これしか選択肢がないと判断した。後で皆の意見を聞きたい。皆も知っているように内観さんは現在まだ失踪事件の解明に全力を投入している。内観さんはこの問題に見通しが付き次第、プロジェクトに参加することになった。それまでの間、祐子と亜希子は内観さんの失踪事件解決の為の活動に全面的に協力して欲しい。内観さん、協力してくれるかな？」

「はい、わかりました」

「あなた、内観さんと亜希子や祐子が人生を共にするとはどういうことですか？」

「一緒に生活するということだ」

「ふたりとも適齢期ですよ。そんなこと、世間が許すわけがありませんわ」

「そのことは、百も承知だ。しかし、祐子は内観さんと一生共に生きることに決めているし、亜希子も内観さんと生死を共にする覚悟を決めている。他に選択肢は無いと思うが」

祐子と亜希子は口をキッと結んで、じっと藤代肇を見つめている。

「あなた、それじゃあ内観さんにふたりと結婚しろとおっしゃるのですか？そんなことはできるわけありませんでしょう」

「それでは、内観さんにふたりとも諦めてもらい、他の女性と結婚してもらうか、一生独身で生きてもらうほうがいいのか？それで、みんな幸福になれるのか？」

祐子が口を開いた。

「おとうさま、わたしはもし賢さんと分かれるのであれば、生きていません」

祐子の言葉が終わるか終わらないうちに亜希子も言った。

「おとうさま、わたくしの命は賢さんに捧げています。賢さんのいらっしゃる場所に、どこまでも附いて行きます」

「まあ、お前達の気持ちはよく分かっている。だから、これからの自分の人生と、内観さんのこと、家族全体のこと、他の人たちのことを上空から見下ろして、現在の自分の生きる方向を決めなさい」

登紀子は涙ぐんで言った。

「わたしは、とっても悲しいです。どうして、ふたりの娘が、ひとりの男性を好きになってしまったのか・・・どうして良いか分かりません。娘ふたりをひとりの男性に託すなんてことができるのでしょうか？」

「わたしも、できればそれは避けたかった。しかし、もうそうするしかない。内観さん、君はどう思う？」

「はい、わたくしの優柔不断が、祐子さんと亜希子さんに大変な苦痛を与えてしまい、ご両親にも悲しみを与えてしまったことをお詫び致します」

「結婚という形にはできませんすわよ。世間で認められませんわ」

「祐子さんと亜希子さんが受け入れてくだされば、僕には結婚という形式は必要ありません」

亜希子が言った。

「わたくしは賢さんと共に生きられれば、結婚などしなくても大丈夫です」

祐子も直ぐに続けて言った。

「本当は、わたしは結婚したいのです。それに、本当は、わたしは賢さんが他の女性と一緒にいるのは厭です。わたしとだけ一緒にいて欲しい・・・・・・・・」

祐子が涙ぐんだ。亜希子が続けて言った。

「お姉様、わたくしだって、賢さんとふたりきりで生きてゆきたいです」

わ・・・・・・・・」

亜希子の目にも涙が浮かんできた。ふたりの娘の悲しそうな姿を見て、登紀子が出た。

「わたしは女だから分かるの。女は受動的な性を強いられているのですよ。内観さん、あなたの責任は重大ですわ。ふたりの娘を苦しめて・・・」

「申し訳ありません。何と言ってお詫びしたらいいか分かりません」
亜希子が出た言葉を遮るように言った。

「賢さんは何も悪くありません。おかあさまもご存じの通り、わたくしは賢さんに命を助けて頂きました。それで、わたくしが一方的に賢さんに思いを寄せているだけです。それを賢さんが受け入れてくださったのです」

祐子も後を続けて言った。

「わたしも危険な状態にあったとき賢さんに救われました。その時からわたしは賢さんと一生共に生きることに決めました」

登紀子が出た言葉を聞いて決心したように言った。

「ふたりとも、言いたいことは分かったわ。今の気持ちはもうどうすることもできないよね。暫く様子を見ましょ。時間が解決してくれるでしょう。あなた、そうしたらどうかしら」

「わたしは、ふたりの娘の意志に従いたい。お前も、自分のことや世間体を考えないで、ふたりのことを第一に考えなさい」

亜希子が出た。

「わたくしはどんな形でも、賢さんが誰と一緒に生きていようと我慢します。もう既にわたくし自身を賢さんに捧げることに決めてありますもの」

「祐子はどうかね。賢さんが亜希子と一緒に生きていても、耐えられるかね」

「わたしは亜希子さんの様に、自分を押さえることはできないと思います。寂しくなったときは泣いてしまいますし、賢さんにわたしだけを愛して欲しいと思ったときには、亜希子さんのことを憎んでしまうかも知

れません・・・わたし、自信がありません」

祐子の頬を涙が伝わって流れた。藤代肇が言った。

「祐子、おまえは正直な娘だ。それが本当の女性の姿だろう。亜希子は苦しいのに、自分を押し込めているのだろう。だが、よく考えなさい。なぜ、内観さんがお前達ふたりに愛の心を抱いているかを。内観さんは誰に対しても同じように愛情を持っているのだ。一寸変に感じるかも知れないが、わたしが今度のプロジェクトで内観さんを抜擢したのは、今度のプロジェクトにはそのことが絶対必要だからだ。お前達ふたりは、賢さんのその広い愛の中に抱かれて、とても居心地がいいことを知ってしまった。だから、その愛を自分だけのものにしたいと思う。でも、内観さんを縛ろうとしてはだめだ。内観さんの愛に抱かれているだけで満足しなくてはいけない。いいかね」

祐子はスカートのポケットからハンカチを取り出して涙を拭った。

「分かりました、おとうさま。わたしもその通りだと思います。わたしの心が狭すぎました・・・おとうさまのお考えに従います」

祐子は肩をがっくり落としてハンカチで涙を拭いた。

登紀子が言った。

「わたくしも、漸くあなたの仰っていることが分かりました。賢さん、必ずふたりの娘を幸せにしてください。よろしくお願い致します」

「お許し頂いて感謝致します。わたしはふたりを守って生きてゆきます」
賢は此处で自らの選択した結果がふたりの女性の生き方を決めてしまったということを心の中で再確認した。

「さあ、それじゃあ乾杯といこう。吉里を呼んでシャンパンを持って来させなさい」

亜希子が立ち上がって、厨房への入り口のドアを開け、声を掛けて戻って来た。間もなく執事がシャンパンを持って来た。執事は藤代肇の脇に立ってシャンパンを開け、先ず藤代のグラスに注ぎ、続いて登紀子、賢、祐子、亜希子と注いでいった。藤代の発声に合わせて全員が活気のある声で「乾杯！」と唱和し、グラスを傾けた。

賢が藤代家の専属の自家用車に送られてマンションの自分の部屋に戻

ったのは12時を廻った頃だった。藤代肇や登紀子に泊まってゆくように強く迫られたが、どうしても整理しておきたいことがあると言って辞退した。資料の整理も必要だったが、それより、一人になって今後のことを考えてみたかった。ふたりの女性が心配になってきた。どうしてふたりを同時に守ったらいいかと思った。しかしもう回答をしてしまっている。自分の意識に忠実に生きようと考えた。自分のことは何とかできるとしても、もし藤代肇の言うことが真実だとすると、いつまでも失踪事件に拘わっている訳にはいかないと思った。できるだけ短時間で、失踪事件を解決する必要がある。可能性の高いところから解決していこうと思った。賢は明日から直ぐに遠野に行く決心をした。時計は0時20分を差していたが、賢は祐子に電話を掛けた。

「あなた、電話を待っていたわ」

「どうして、俺が電話をするって分かったんだ」

「あなたの気持ちを追っていたら、絶対わたしに電話をしようと思ったの」

「そうか、祐子、苦しめてしまって済まなかったな。しかし、俺の心は変わらない。いつも俺の中にお前がいる。で、あしたから遠野に行くんだが一緒に行けるか？」

「行くわ、どの位になるの？」

「多分、1週間だ」

「亜希子さんはどうするの？」

「亜希子さんも連れて行くよ。駄目と言っても附いて来るだろうし」

「分かったわ。わたしから話した方がいいかしら？」

「いや、俺が電話する。大変だけど、10時半頃の新幹線でお出掛けのつもりだ。大丈夫か？」

「わたしは大丈夫」

「それじゃあ、10時に銀の鈴で待ち合わせよう」

「分かったわ。じゃあ、おやすみなさい。あなた、愛しているわ」

祐子はまた、最後の部分を小さな声で言った。賢は直ぐに亜希子に電話した。亜希子も直ぐに出た。

「もしもし、亜希子です。賢さん、お電話、お待ちしております」

「分かったのか？」

「あなたは優しい方だから、必ず電話をくださると思っていました」

「君には済まないと思っているよ」

「いいえ、わたくしは今とても幸せです。もう、決してあなたから離れません」

「うん、おれも君を全力で守るよ……ところで、明日から1週間ほど遠野に出掛けるけど君は一緒に行けるかな？」

「わたくし、あしたは……一緒に連れて行ってください」

亜希子は華道の発表会に出席しなくてはならなかった。発表会が終えてから直ぐに後を追うしかないと考えた。

「それじゃあ、少し急だけど朝の10時頃に銀の鈴に……」

「もしもし、わたくし明日お華の発表会があるの。それが終えてから自分で遠野に向かいます」

「そうか、分かった。それじゃあ、スマホに電話を入れてくれよ。宿は三人分部屋を確保しておくから。まだ、どこに泊まるか決めてないけどな」

「分かりました。多分、夜9時過ぎになると思います。よろしく願い致します」

「うん、分かった。発表会が終わったら、直ぐに電話をくれよな。それじゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

遠野2

賢は約束の時間10分前に銀の鈴に着いたが、既に祐子が待合所のベンチに腰掛けていた。祐子はトラベルバッグを横に置いて、脱いだウールのコートを畳んで膝の上に載せ、その上にいつもの白いハンドバッグを置いている。遠野が寒くなってきたのを知っているのだと賢は思った。体をそっと包んでいる白のタートルネックのセーターが祐子を輝くような美しさに浮き上がらせていた。

「祐子、白が似合うな」

「あら、早いじゃないの？」

「朝、ゆきさんに電話を入れた。ゆきさん喜んでいたよ。何かみやげを買って行こう。そうそう、亜希子さんは後で追って来るって」

「ええ、知っているわよ」

ふたりはゆきに草加煎餅、太郎と信次にクッキーを買った。切符を買ってから改札を抜け、駅弁と茶を買って10時36分発の東北新幹線に乗った。新花巻駅まで乗り換え無しで行けるので、ふたりはくつろげることを喜んだ。久しぶりのふたりきりの電車の旅に祐子は心が躍った。

「あなた、このままふたりでどこかに消えてしまわない？」

「そうできたら、楽しいだろな」

「わたしたち複雑な人間関係の中に入ってしまったわね」

「仕方ないよ、俺たちふたりとも探求心旺盛だから。黙っていてもいろいろな人と関係が出来てくるさ」

「そうね。それはそれで、楽しいわね。ねえあなた、おとうさまからどんな仕事をするように言われたの？」

「今は、誰にも言うてはいけないと言われてるんだ。たとえ祐子にもだ。知っていることを覚られても駄目だからな・・・聞かない方がいいよ、負担になるから。知っていることを覚られなくて、結構気を遣うからな」

「じゃあ、わたし、聞かない。でもあなた、いきなりプロジェクトの責任者の職に就くって大変なことよ。ふたりの妻ぐらい楽に食わせることができる職だものね、ふふふ」

「君だけだよ。だけど、そんなこと亜希子さんには言えないしな。これから、いろいろなことが起きるぞ。絶対俺を信じていろよ。そうしないと、ふたりの絆がほぐれてしまうぞ」

「大丈夫よ。だけど、亜希子さんは兎も角、他の女性には必要以上に優しくしないでね」

「うん、分かっているよ」

「今日は遠野に泊まりたいわ。でも、宿が取れるかしら」

「本当はね、宿はもう取ってあるんだ。遠野の博物館の前の遠野エリア

ホテルさ。ゆきさんの家にも近いよ」

「あなた、大好き！3部屋取ったの？」

「うん」

「2部屋でも……無理ね」

新幹線の2時間半は瞬く間に過ぎ去った。祐子は賢に身体を寄り掛けていた。祐子が身体を動かす度に、髪のかな臭いした。祐子が横にいることに意識が集中すると、恋慕の感情が込み上げてきて賢は祐子の掌を握り締めたり、指を絡めたりした。祐子はずっと夢心地だった。小さな椅子だったが、そこはふたりだけの心地よい空間だった。11月も末だ。外の景色はしんとしていて、花巻に着く頃には、山の尾根に積もった雪が目映る。雪の白を覆うように薄曇りの空が迫っていた。

「もう、雪が降ったのね、あなた。見て、すごく綺麗！わたしね、雪の白、大好き」

新花巻の駅では、釜石線に乗り換えるまでに50分ほど時間があつた。

ホームを歩いていると亜希子から電話が掛かった。

「賢さん、ごめんなさい。わたくし、きょうはお華の会の品評会にも出席しなくてはならなくなってしまいました。そちらに行けません。明日の朝発ちます」

「もしもし、分かった。明日待っているからな。また連絡しろよ」

「はい、祐子お姉様にもよろしくお伝えください」

祐子が興味深そうに賢の顔を覗き込んだ。

「亜希子さん、何だって？」

「今日は来れないって。ホテルをキャンセルしなくっちゃな」

そう言うと、賢は直ぐにホテルに電話を掛けて、予約してある3部屋の内、1部屋を残し、2部屋を翌日からの予約に変更した。その電話を聞いていた祐子は顔が紅潮し、胸の鼓動が早くなってくるのを感じた。ふたりが新幹線の改札を出てJR釜石線に向かう地下通路への連絡口の方に向かおうとすると、そこに鹿島康介が立っていた。康介は軽く会釈してから賢に近付いて来た。

「やあ鹿島さん、久しぶりです。お元気でしたか？どうしてここに？」

鹿島康介は挨拶などどうでもいいという様に直ぐに要件を話し始めた。「今日来るって子供に聞いたんすよ。野口孝子さんのことで分かったことがあるんす。亭主のことだけどいつか話せるかな。それに、青森の事件のことも一寸面白いことを教えるっすよ」

「今日はこれから遠野に向かうところだけど、鹿島さんに時間があれば、ここで少し時間を取ることができますけど」

賢と祐子は一旦荷物を横に置いて康介の方に向き直った。賢は康介に祐子を紹介した。康介は頭をちょっと下げただけだった。三人は駅の構内の待合室に戻った。待合室の中は新幹線から降りたばかりの人たちで混雑していたが、廻りには御輿や鹿踊りの衣装が展示されていて、地元の雰囲気印象づける工夫が施されていた。三人は賢を真ん中に、並んで椅子に腰掛けた。

「野岸孝子さんの旦那、秋田刑務所に入ってるんす。5年前に強盗障害で起訴されたんす。何でも物証があって、弁護側の上告も棄却されて、そのまま有罪が確定したみたいっす。野岸孝子さんはそんなこと、子供達にゃ話してなかったらしいす。俺も青森の事件を探ってて偶然知ったんす。あの旦那、裁判の陳述ん時、妙なことを言ったらしい。気が付いたら、事件現場にいたなんて。だから、無意識的な犯行と、偽装告白と見なされたみたいです。殺意が無く、精神的不安定さも考慮されて7年の受刑が確定したっす。それが、よく考えると妙なんだな。その障害を受けた女性は旦那の会社の同僚で、時々ふたりで会っていたらしいんだ。その女性の方が積極的で、旦那にモーション掛けていたんだって、旦那の会社の人が言ってたす。旦那はまじめな人だったんで、初めは断っていたらしいけど、結局その女性の言いなりになったようで、その日も仕事を終えた時、その女性から電話があったらしいす。呼び出されたみたいなんす。旦那もそんなに悪い気はしていなかったようだから、強盗障害なんてことは考えられないんだけど、その女性の証言が鍵だったようなんだ。背中から腹部を刺されて、3ヶ月くらい入院したらしいけど、背後に感じた気配が、旦那のようだったって証言したんだ。それに財布に50万円入っていたのが、それが無くなっているって。その金

額と同じ額の金が旦那の鞆の中にあった封筒から出てきたんだ。まあ、結果的には検察側が強引に有罪に持っていった感じがするけどな。旦那は刑務所の中でも、変な性癖があって、壁に寄り掛かったまま、全く動かなくなることがよくあるらしい。大抵、10分前後で元に戻るようだけど、廻りの囚人は気味悪がって近付かないようなんだ。俺がこのことを知ったのは、青森の事件、うん、大阪のサラリーマン竹下が蒸発して、青森で放置されていた竹下の車の後部座席から彼の着ていたコートが見つかった事件からなんだけど。あの事件で失踪した竹下と野岸孝子さんの旦那は古くからの友人で、付き合いがあったらしいんだ。旦那も12、3年前に一時大阪に転勤していた時期があって、その頃はもう一人の友人と三人でよく飲み屋に行ったりしていたみたいだ。旦那はその後月に1、2度は大阪に出張していたらしい。どう、少しは参考になったすか？あれからの調査結果はどう？」

「ええ、和歌山の愛子さん、帰還できたんですよ」

「そうそう、俺もそれを聞いてビックリしたっすよ。それで、俺、他の失踪事件を真剣に調べてみようと思ったんだ。弘前の殺人事件、覚えている？お婆さんと二人の孫が行方不明になって、みんな聡出で探したら、山の中で3人の遺体が発見されて、その脇に例の自家用車が乗り捨てられていたってやつ。その車の中から竹下さんのコートが出てきた訳。だけど、竹下さんが大阪で失踪したのはその前の日の夕方だろう、どう考えてもおかしいよな」

「そのコート、本当に竹下さんのものだったのですか？」

それまで黙っていた祐子が口を挟んだ。

「うん、名前が縫い込んであったわけではないけど、ポケットの中から、竹下さんの従業員証が出てきたんだ。それに、竹下さんの母親の話じゃ、そのコートは確かに竹下さんのものとのことなんす。コートに付着していた髪の毛のDNA鑑定からも竹下さんのコートと断定されたらしいす」

「大分参考になりました。実は、わたしは愛子さんの帰還の時に和歌山にいたのです。あの実際に実現できた帰還の経験から、帰還は帰還させ

ようとするものと、帰還するものとの意識の方向性が合って、そこに意識のエネルギーを集中させた時に、実現できるよさだということが分かってきたんです。それで、野岸孝子さんのことも、その原理が正しいと仮定して、それに基づいて、挑戦してみようとしているんです」

「へえ、そうなんすか。そいつは凄い。俺にも協力させてもらえませんかね」

「ええ、是非ご協力頂きたいと思います。今日はこれから遠野の野岸孝子さんの家に向かいます。あの娘さんと2人の弟達に会って、これから挑戦する帰還についていろいろ説明をしようと思っています」

「そうなんだ。今日は惜しいけど、まだ仕事が残っているんで、後でまた連絡貰えないすか」

ふたりは鹿島康介と分かれた。新花巻から遠野までは途中駅での待ち時間も無く、1時間ほどで着いた。ホームに降り立つと身震いするほど寒い。

「寒いね。祐子、コートを着て来て正解だったな」

「あなた、そのジャンパーだけじゃ一寸辛いわね」

「大丈夫だ。何か暖かいものでも飲もうか？」

ふたりは自動販売機でホットティーを一つ買い、ふたりで交互に飲んだ。

「まず、ホテルにチェックインしようか？」

祐子は、早く荷物から解放されたかった。身軽でふたりきりになりたかった。ふたりは駅から10分ほど歩いて遠野エリアホテルに着いた。チェックインの時、賢がレセプションシートに記入した。同伴者名は必要なく、同室人数の欄に2名と書き込めばよかった。ふたりは直ぐに5階の部屋に向かった。ベージュを基調にした落ち着いた色合いの部屋で、アメリカのビジネスマン相手のホテルのようなモダンな空間だった。静寂な雰囲気かふたりを包んだ。祐子は荷物を置くと、突き当たりにある窓に近づいて外を覗き見た。窓は公園に面していて、木々は紅葉も終わり葉を落として既に冬への備えが済んでいた。

「落ち着いたホテルね、気に入ったわ」

そう言うのと祐子は駆け足でベッドの脇に立っていた賢のところまで戻って来て賢に飛びついた。ふたりは抱き合っていたが、そのままベッドに倒れ込んだ。祐子は積極的だった。ふたりは暫く口づけを交わして、戯れていたが、やがて起き上がり荷物の整理を始めた。

「まだ、4時半ね。あなた、シャワーを浴びたら」

「うん、少しさっぱりした方がいいかな」

そう言うのと、賢は下着を用意してシャワールームに向かった。裸になり、シャワーの下に立ってコックを捻った時、祐子が裸になって入って来た。祐子は賢の背中から抱き付いた。賢は身体をぐるりと回転させて、祐子を抱き締めた。シャワーの湯がふたりを包んだ。

「祐子、今はやめよう、これからゆきさんに会わなくてはならないし」

「だめ」

シャワーの湯がふたりを濡らしている中で、賢は落ち着かない感覚が広がってきて祐子から離れた。祐子は満足しなかった。賢はシャワーのコックを閉めるとタオル掛けからバスタオルを取って祐子に渡し、自分も身体を拭いてふたりで部屋に戻った。バスタオルで隠しもせずベッドに全裸で仰向けになった祐子の姿が、艶めかしさを超えて淫らにさえ見えきた。

「どうしたんだ、祐子」

祐子は応えなかった。藤代肇から祐子と亜希子ふたりと共に生きる様に言われてから、祐子は意識的に賢に関係を迫っているように見えた。ベッドに横たわっている祐子の姿は、まるで賢を挑発でもしているかのようだった。賢が耐えられなくなってきたとき、スマホが鳴った。賢がセカンドバッグに近づき、スマホを取り出すと電話は切れた。ようやく祐子も落ち着いてきた。少しして再びスマホが鳴った。賢は今度は直ぐに電話に出た。ゆきからだった。今日は早引きして来たとのことだった。何時に来るか聞いていた。賢は3、40分後に行くと言った。ふたりは急いで衣類を身に付けると、みやげを手にしてホテルを出た。外はチェックインする前よりずっと冷え込んでいて、歩いていると寒さが身体の芯まで染み込んで来るようだった。ふたりはタクシーに乗った。ゆきの

家は直ぐ近くのはずだったが、方向が分からなかった。タクシーを降りて、ゆきの家の玄関に着いたのは5時20分過ぎだった。玄関の呼び鈴を鳴らすと、直ぐにゆきが現れた。ゆきの「いらっしやいませ」という声に、太郎と信次が飛び出して来た。満面の笑みを湛えたゆきに促されて、ふたりは縁側に面した部屋に通された。部屋には焼き肉の香ばしい臭いが立ち込めている。賢は前回ここに来た時、縁側の外から何度も覗いたことのある部屋だったが、内側から縁側を通して庭を望むと、自分たちがどこか別の世界から来た異邦人になったような、異様な感覚を覚えた。既に日が落ち掛けていて、辺りの薄暗い雰囲気には比喩外はとても明るく感じられた。部屋と縁側の調和が、都会の喧噪の中では味わえないゆったりとした落ち着きを醸し出していた。ふたりが座卓の片側に並んで座ると、太郎と信次が二人に向かい合ってちょこんと座った。

「太郎君、信次君元気だったかい？」

「うん、俺っちいつも元気だよ。なあ信次。小父さん達も元気だった？」

「元気さ」

ゆきが湯飲みを二つ持って来て賢と祐子の前に置いた。

「内観さん、崎野さん、先日はいろいろありがとうございました。全く、夢の世界に行ったようでした。あれから、太郎と信次がまたディズニーランドに連れて行けて五月蠅いんですよ。一生の思い出になりました。テレビにどこかの遊園地が出ると、太郎も信次も大騒ぎで、ディズニーランドの話を始めますよ。わたしは浅草も凄く印象に残っています。本当に夢のようで」

「随分楽しかったのね、よかったわ。わたしたちも久しぶりにディズニーランドに行って、とても楽しかったわ」

「これ手土産だけど、後で皆で食べて」

「ありがとうございます」

「小父さんありがとう」

「小父さんありがとう」

太郎を真似た信次のいつもの繰り返しを聞いて、賢と祐子は思わず微笑んだ。

「太郎、信次、内観さんのことを小父さんなんて呼んじゃ駄目よ。お兄さんって言いなさい」

ゆきが弟たちに注意をした。ゆきは弟たちに賢のことを兄と呼んでほしなかった。

「ゆきさん、今回こちらに来たのは、君たちのお母さんを呼び戻す為なんだ」

「えっ！本当ですか？そんなことできるんですか？」

ゆきの驚いたような言葉に、太郎と信次は目を丸くして、膝の上に両腕を立て、口をきりっと結んで姿勢を正した。

「実は、ついこの間、失踪していた和歌山の中川愛子さんが1年振りに戻って来ることができたんだ。その帰還にぼくも協力したんだけど、その時の方法で試してみようと思ってね。それにこの祐子さんも、鹿児島で僕と亜希子さんが失踪した時、僕たちを呼び戻してくれたんだよ。その時も同じような方法で失踪していた僕達を呼び戻すことができたんだ」

「そうなのよ。信じられないかも知れないけど、本当に呼び戻せたのよ」

「とっても難しそうですね。わたしたちも何かするのでしょうか？」

「そう、ゆきさんや太郎君、信次君が中心になって、呼び戻すんだ。後でゆっくり説明するよ」

「ところで、太郎君、信次君、ふたりともちゃんと学校に行っているかい？」

「もちろんさ。内観のお兄さん。おれ、この間、理科で100点取ったんだぜ」

「おれも、100点取った」

「そうか、ふたりとも頑張っているんだな」

「遊びもたっぷりしているけどね」

ゆきがからかうように言った。

「お姉ちゃんがこええから、おれ、学校じゃ先生の言うこと一生懸命聞いているんだ」

「おれもお姉ちゃん、こええ。だけど、おれお姉ちゃん大好きだ」

「内観のお兄さん、またディズニーランドに連れて行ってよ」

「よし、来年になったら、きっとまた連れて行ってやる。その代わり、お姉ちゃんの言うことをよく聞いて、学校の勉強をしっかりとやるんだぞ。太郎君、僕のことを賢って呼んでくれてもいいよ。ゆきさんもね。内観のお兄さんなんて言いにくいだろう」

「太郎、内観さん、いえ・・・賢さんに無理言っちゃ駄目・・・すみません、ふたりとも我儘で」

ゆきは少し照れを隠すように太郎の方を見ながら言った。

「いやゆきさん、また来年、君も一緒にディズニーランドに行こう。そうだ、今度はディズニーシーでもいいな」

ゆきは顔を紅潮させ、口元をほころばせた。

「本当ですか？嬉しい！また、頑張らなくちゃ。でも、こんなに甘えてもいいんですか？」

「僕たちは、みんなと一緒にいるのが楽しいんだ。なあ、祐子」

「そうよ、わたしも楽しみにしているわ。時間が十分あるから、ゆっくり計画立てましょう。わたしのことも祐子って呼んでね」

「賢さん・・・祐子さん、わたし、あまり上手じゃないんですけど、夕御飯用意しました。一緒に食べてくれますか？」

「本当？それは嬉しいな。ゆきさんの手料理か」

「おじ・・・賢お兄さん、ゆき姉ちゃんは料理がうまいんだぜ。俺っち、ゆき姉ちゃんの料理大好きだ」

「おれも大好きだ」

ゆきが席を立てて奥の台所に向かった。祐子もゆきの後を追った。既に料理は出来上がっているようだった。ゆきと祐子は座卓の中央に30センチ程度に切った段ボールを置いて、廻りに何枚かの空の小鉢とレンゲを並べた。鍋料理だった。ゆきが段ボールの上にカセット式の卓上ガスコンロを置き、台所に戻って具の入った鍋を持って来て掛けた。点火装置を捻って火を付けると、忙しそうに再び台所に戻り、盆に5人前の茶碗に盛ったご飯と箸を載せて持って来て全員の席に並べた。祐子もゆきを手伝って、人参とゴボウ、蒟蒻と牛肉の旨煮を盛り付けた小鉢を運ん

で来て食卓に並べた。ゆきが漬け物の小鉢2つと大皿に盛ったうどんを用意し、祐子が全員の前に湯飲みを並べると準備が整った。ゆきと祐子の呼吸がぴったり合っているの、賢はふたりがまるで姉妹のよう思えた。

「お待たせしました。祐子さん、お手伝いさせてしまって済みません」

「いいのよ。とってもおいしそうなお味がするわね」

「うまく、出来たかどうか分かりませんが、ジンギスカン鍋もどきなんです。正式なお鍋がありませんから、あらかじめ野菜を敷いて、焼いたお肉を上に乗せてあります。少し暖めれば、直ぐに頂けます・・・みなさん、どうぞ」

「それじゃあ、いただきようか・・・いただきます！」

「いただきます！」・・・

肉は羊ではなく豚だったが、既にタレに浸けて焼いてあり、鍋の底には野菜の汁が滲み出て肉汁と混ざり、みそ味を感じさせる独特の甘みのある味がした。賢と祐子は本当に美味しいと思った。煮物も美味しく出来ていて、ふたりとも感激した。食事をしながら東京旅行の思い出話に話題が集中した。鍋の具が無くなって汁だけが残ると、ゆきは鍋の中に入れたうどんを入れてたまで掻き混ぜ、全員の小鉢に盛っていった。うどんがまた美味だった。

「ゆきさん、お料理上手ね。本当に美味しいわ」

「わたしはお母さんの真似をしているだけです。まだまだ、お母さんの足下にも及びません」

「いいえ、とってもお上手よ。いいお嫁さんになれるわね」

ゆきはサッと顔を赤らめて目を伏せ、上目遣いにちらっと賢の方を見た。

食事が済んで座卓の上が片付くと、太郎と信次が隣の部屋に出て行って、信次が白い大きな球を抱えて戻って来た。太郎は食事中に話題になった財布と東京スカイツリーの置物を持って来た。信次が球を座卓の上に置くと、太郎は自分の持って来たものを端に置きながら言った。

「賢お兄さん、こいつ、よく色が変わるようになったんだじゃ」

「そうなんです。このごろ、特によくいろいろな色に変わるんですよ。最初は太郎や信次は怖がっていましたが、大分慣れて来たみたいですよ」

賢は前回見たときと比べ球が白っぽくなったように感じた。手を触れると球の色が淡いブルーに変わった。

「本当、凄いわね。どうして色が変わるのかしら」

そう言いながら祐子も球に触れた。賢は手を触れたままだ。球の色はゆっくりと白に戻り、少しずつピンク色に変わっていった。それを見て賢が手を離すと、球は薄い黄緑色に変わった。その色はまるで金色のように見える。祐子が手を離した。球はまた元の白に戻った。

「不思議なボールね。手を触れると色が変わるのね」

「はい、そうなんです。でも、色が変わらないこともあるんです」

太郎が自慢げに言った。

「賢お兄さん、この球、触らなくても色が変わることがあるんだじゃ。ゆき姉ちゃんが怒ると赤くなるんじゃ。それにこいつ、俺っちが触っても色はかわんねえんだ。この間、賢お兄さんから手紙が来たとき、ゆき姉ちゃんが手紙を読んでいるときはピンク色になったんじゃ。俺っちが手紙を読んでいるときは、何にも変わらなかったのに」

賢は祐子が輝いているときに見える色が、先ほど祐子だけが触れているときにこの球が発していた色に似ていると思い、この球がオーラに反応して、可視光を発する機能を持っているのではないかと思った。信次が言った。

「こいつ、大きくなったり小さくなったりするんだじゃ」

「うそつけ、色は変わるけど、大きくなったりしないぞ」

「いいや、おれっちが嬉しいときは大きくなる。おれ何度も見たぞ。こいつ怒ると小さくなるんじゃ。赤くなって小さくなるんじゃ」

賢は以前、信次が言っていたことだと思った。この球は人の感情に反応することは確かなようだった。食事が済んで1時間ほど経った。賢は時間的に少し早い、これから試行を試みようと考えた。

「ゆきさん、太郎君、信次君、これから暫く僕の言うことをよく聞いて

欲しいんだ。先ず、ゆきさんは太郎君の横に来て、三人並んで座って」太郎と信次が少し横にずれて、太郎の横にゆきが座った。

「今から、三人とも僕の言う通りにして……先ず、静かに目を閉じて、太郎君、きつく瞑らないで……そう、そっと目を瞑って、何にも考えないで……息を吐いて、ゆっくり息を吸って、これを50回繰り返すよ……吐いて、吸って……何にも考えないで……吐いて、吸って……これから、お母さんのことを思って……お母さんが現れるように心の中で思って……そう、遠くにお母さんが見えてくるよ……そうお母さんが見えたら、心の中で、お母さんと呼んで、「こっちに来て」って、呼んで、何度も呼んで、ずっと呼び続けて……」座卓の上の球が次第にオレンジ色になって来た。突然信次が、声を出した。

「母ちゃん」

「母ちゃん」

太郎も声を上げた。ゆきはその声で目を開けた。太郎が興奮して言った。

「いま、母ちゃんがこっちに來たんだ。父ちゃんが後から附いて來た。だけんど、母ちゃんは父ちゃんの方を向いて、帰って行っちゃった」

「わたしにも見えました。本当に母でした。父が後から附いて來て、母を連れて行ってしまいました」

ゆきの目に涙が浮かんでいる。

「本当に母でした。まるで、そこに居るようでした」

ゆきは息を弾ませている。大分疲れたようだった。

「うまくゆくかも知れないな。一寸ゆきさん、二人だけで話があるんだ」

「はい、それじゃ隣の部屋で」

そう言うと、ゆきは立って隣の部屋に入り、灯りを点けた。太郎と信次はきょんとしている。祐子は賢が父親の話をするつもりだと思った。ゆきと賢が隣の部屋に入り襖を閉めると、祐子は太郎と信次に母親の姿が見えた時の様子を詳しく聞いた。ふたりが説明する母親の姿の顕現は、祐子が体験した賢の姿の顕現とよく似ていた。祐子は野岸孝子を引き戻すことが必ずできると確信した。賢とゆきは隣の部屋で立ち話をし

た。ゆきは賢とふたりきりになって緊張した。

「ゆきさん、実はお父さんのことだけど、ビックリしないでください・
・・実はおとうさんは刑務所にいるんです」

「やはりそうでしたか。わたし薄々感付いていました。以前、毎晩のように母が夜一人で泣いていたのを覚えています。その頃、よく警察の方が来ていましたから、何か変だと思っていました。母に聞くと、父が行方不明で、探しているって言っていました」

「おとうさんは、ある強盗障害の罪状で、有罪判決を受けて服役中なんです。でも、お父さんは無罪を主張し続けています。僕も無罪だと信じています」

ゆきの目に涙が溜まって来て、溢れ出して頬を伝わって流れた。賢はポケットからハンカチを取り出し、ゆきの涙を拭ってやった。ゆきは賢の胸に顔を埋めて、声を忍ばせて泣いた。賢はそっとゆきの頭を抱き寄せ、そのままじっとしていた。ゆきは暫く泣いていたが、やがて泣き止んで顔を上げた。賢が再び涙を拭いてやると、ゆきは唇を噛み締めて言った。

「もう、大丈夫です」

「ぼくは明日、お父さんに会ってくるよ」

「わたしも行きます。いいえ、一緒に連れて行ってください」

「今は、まだ会わない方が・・・」

「いいえ、わたしも一緒に行って、お母さんのことを報告したいんです」

「分かったよ。それじゃ朝ここに来るから、一緒に行こう。夕方までに戻れば、太郎君や信次君にも気付かれないだろう」

ふたりは居間に戻った。祐子はゆきの目を見て、泣いたのが直ぐに分かった。太郎と信次もゆきの涙の跡に気付いたようだった。

「ゆき姉ちゃん、どうしたんだ。賢お兄さん、どうしたんだ」

「君たちのお父さんのことを話したんだよ。いま君たちにも見えただろう。お父さんは遠くに行っているんだ」

「おれ、知ってるよ。大阪に行ってるんだ。母ちゃんが言ってた」

「兎に角、遠くに行っちゃってしまっていて、お母さんと呼んでるんだ。だからお母さんが戻って来れないんだ・・・明日のこともあるし、今日はこ

こまでにしよう。明日の朝はぼくがゆき姉ちゃんを送るからね。夕方6時過ぎにゆき姉ちゃんを連れてまた帰って来るよ。それまで、おとなしく留守番しているんだよ。明日の夜、もう一度お母さんと呼んでみよう」賢はゆきに頼んでタクシーを呼んでもらい、祐子と共にホテルに戻った。ホテルの部屋には出掛けに点けたままになっているルームライトの光が窓ガラスに映っていて、部屋が窓の外まで続いているような錯覚を覚えた。祐子は直ぐに窓に近寄りカーテンを引いた。戻って来ると、祐子は賢に抱き付いて口づけをした。賢も祐子を軽く抱き締めた。

「ゆきさん、泣いていたわね」

「うん、お父さんのこと薄々知っていたようだ。ゆきさん、可愛そうだったよ。我慢していた涙が一気に吹き出したんだ」

「あなた、これからどうするの」

「おれはゆきさんと一緒にお父さんに会ってみる。孝子さんを戻す為には、お父さんの協力が無くてはならぬそうだ」

「でも、いま刑務所に居るんでしょ」

「そう、彼は確か秋田刑務所に服役中だって言ってたな。明日秋田に行って、お父さんに会って夕方までに戻って来るよ」

「明日、亜希子さんが来るわよ。それに駅で会った方とも会う約束したでしょ」

「うん、ふたりに電話するよ」

賢は先ず鹿島康介に電話して2日後の昼に花巻で会うことにした。康介は「楽しみにしている」と言った。賢は続いて亜希子に電話した。

「賢さんですか？そちらは如何ですか？随分寒いんじゃないですか？お風邪を召さないようにしてください。わたくしは、明日の朝そちらに向かいます。お昼過ぎには遠野に着くと思います」

「実は明日俺は秋田に行って来るんだ。祐子が遠野に残るから、一寸電話を代わるよ」

「もしもし、亜希子さん？祐子です。明日は、夕方6時にゆきさんの家に行くことになっているの。昼間は時間があるわ。わたし、駅に迎えに出るわね。ふたりでどこか見物に出掛けましょう」

「はい、お姉様。わたくし楽しみにしていますわ。この前はテレポーテーションで、直ぐに連れ戻されて仕舞ったでしょう。とっても残念でしたもの」

祐子は電話を切るとそれを賢に渡した。ふたりは、暫くお互いの目を見つめ合っていた。祐子は先ほどと違い、少し控え目になっている。賢が積極的になった。

.....

「ずっとこのままで居よう。なあ祐子、また一つになろう」

「うん」

二人は目を閉じ、抱き合い、唇を合わせたまま動かなかった。15分ほどすると二人の眼前に光の球が見え、それが広がって、自分たちが一つであるという感覚が体中に広がった。賢はそっと目を開けたとき、祐子の閉じた目尻に涙が流れているのを見た。賢は祐子を強く抱きしめて、終えた。祐子は自分の身体の中に暑い生命が流れ込んで来るのを感じた。ふたりはそのまま10分ほど抱き合っていて、静かに離れた。

「きょうは抱いて寝てね」

「おまえも離れるなよ」

ふたりは抱き合ったまま毛布に潜り込んだ。時々眠りに落ちたり目覚めたりしたが、賢は決して祐子を離さなかった。

一晩中抱き合っていた割には目覚めは良かった。6時半を少し廻っている。賢が言った。

「祐子、まだ寝ているよ。俺はこれから秋田刑務所に行って来る。戻ったら電話するから」

「いいえ、あなたと一緒に行動するんだから起きるわ。気を付けて行って来てね。あなた、大好きよ」

ふたりは手際よく衣類を身に着けた。朝食を済ますと、フロントで部屋の予約変更の確認をした。幸い、今日から予約したかった2部屋は4階の部屋で、昨夜から空室のようだった。賢はフロント係と交渉して、祐子の荷物を新しい部屋の一つに移動する許可を得ることができた。祐子は新しい部屋の鍵を借りると早速荷物を移動し、鍵をフロントに返し

た。ふたりはタクシーでゆきの家に行き、ゆきを乗せて遠野駅まで行った。賢とゆきはそこで祐子と分かれた。7時53分発だった。賢達が改札を通りぬけて見えなくなるまで祐子は見送った。祐子は賢の背中に、我慢できないほどの愛おしさを感じた。横にいるのが自分ではなく、ゆきであることにもどかしさを感じた。後を追いたいと思った。暫くボーッとして構内を見つめていたが、やがて思い直したように向きを変えて歩き出した。

賢は電車の中でノートを取り出し、接見中に質問したり、頼んだりすることを箇条書きにした。ゆきがそれを覗き込んでいる。今朝祐子がスマホでWEBを調べ、刑務所は秋田駅からタクシーで10分程度、接見時間は公式には30分あるが、実質的に接見できるのは15分程度だと教えてくれた。15分間で話せることは限られている。賢は今回の接見では野岸孝子の帰還のみに目的を絞ることにした。

「本当は不安があったんだよ。もしかしたら僕は接見を拒絶されるんじゃないかって思ってね。だけど、ゆきさんは長女だから絶対接見できると思う。僕も一緒に接見できたら問題ないけど、もしゆきさんだけしか接見を許可されなかったら、ゆきさんがお父さんと話をして、ここに書いてあることを頼んで欲しいんだ」

ゆきは賢とふたりで電車に乗っているだけで胸が躍った。その一方で、父親に会うことを考えると、動悸にも似た、突き上げるような鼓動になった。秋田駅には11時少し前に着いた。駅から出ると、ふたりは直ぐにタクシーに乗り刑務所に向かった。接見の手続きをするとき、受刑者との関係を記入する欄があったがそこに、ゆきは長女と記入し、賢は娘の友人と記入した。看守が確認の手続きを行うのに15分以上掛かった。手続きの時間を入れて30分である。看守が戻って来て、あと12、3分で接見を済ます様に注意した。賢に対しては何の注意も無かった。ゆきと一緒によかったと賢は思った。接見場所に案内されると、既に野岸孝子の夫が窓の向こうの接見室の椅子に腰掛けていた。痩せた中背の男で、生きる気力を失ってでもいるかのように見える青白い顔をした男性だった。その姿を見るとゆきの目から涙が溢れだした。テーブルを挟

んでガラス越しに向き合うと、ゆきが嗚咽を堪えて呼びかけた。

「おっ、お父さん！」

「ゆき、ゆき、よく来てくれたな。元気だったか？お母さんは元気か？太郎や信次はどうだ？」

野岸和也の目にも涙が浮かんだ。

「お母さんは今行方不明なの。今日はお母さんを助ける為に来たの。ここにいる内観賢さんがお母さん呼び戻してくださるわ」

野岸和也はその話を聞いて驚いた。目の動きが落ち着かなくなったのを察知した賢は急いで話し始めた。

「初めまして、わたしはゆきさんの友人の内観賢です」

「わ、わたしは、野岸和也です・・・そ、それで、わたしはどうすればよろしいのでしょうか？ここに居たのでは何もできません」

「あなたは、奥さんが失踪されていることをご存じ無かったのですね？」

「はい、全然知りませんでした。1年前に急に女房が接見に来なくなったので可笑しいとは思っていました。不安で堪りませんでした。わたしに見切りを付けたのかとも思ったりして。毎日、ああでもない、こうでもないと思い悩んでいました。ここは娑婆からは切り離されていますから外の事は何にも分かりませんし」

「わたしは今、奥さんが戻って来られるようにゆきさんと一緒に努力しています。直ぐには理解して頂けないでしょうが、これは精神作用と関係のあることです」

「話がよく分かりませんが、女房が行方不明で。何とか探し出そうとしてみてくださいということですか？」

「そうです。ゆきさんが意識を集中して奥さん呼び戻す必要があります。詳しいことは説明している時間はありませんが、是非協力して頂きたいのです」

「わたしは、毎日女房や子供達のことを考えて、楽しかった時の思い出に耽っています。特に太郎と信次はまだ赤ん坊だったから・・・わたしは妻を愛していましたが、不用意にも他の女性と会う約束をしてしま

って・・・」

野岸和也は涙ぐんだ。ゆきも涙を拭った。

「わたしも、あなたの無罪は信じています。いずれその問題にも取り組みます。でも、今回はわたしの言うことを信じて、わたしの言う通りにして頂きたいのです」

「わかりました。どうすればいいのですか？」

「苦しいと思いますが、今日から1週間、奥さんやお子さんのことを一切考えないでください。無意識に思いが向いてゆくのも、避けてください。全く別のことに意識を持って行って頂きたいのです。あなたの意識が、奥さんがこの世界に戻るのを引き留めているようなのです。この1週間、わたくしたちは奥さん呼び戻すことに全力を傾注します」

「分かりました。やってみます」

「特に、夕方から真夜中までは、絶対奥さんやお子さんのことを思わないでください。そう言われるとますます意識が奥さんに向いてしまうはずですから、奥さん以外の最も好きなものを思考の中で展開してみたらいいと思います」

「分かりました」

賢は時計を見た。まだ、5分間残っている。賢は野岸和也自身について質問した。

「もし、差し支えなかったら、あなたについて教えて頂けますか？」

「はい、何でも言います。ここにいるわたしは刑期の満了まで、何の希望も無いのですから」

「あなたは、無意識でどこかに移動してしまふことがありますか？」

「はい、時々。妙な話ですけど、この事件の時もわたしが思いもしないところに現れてしまふって、強盗にさせられてしまつたんですから。もつとも刑務所に入ってからは何処かに移動してしまふことは無くなりましたけど。唯、心が何処かに飛んで行って、そこで見たり聞いたりするというようなことが時々起きます。ほんの10分程度の間ですけど。ここに居ると、それも楽しみになっています。初めは、さぼっているって、みんなにどつかれましたけど、その間のわたしは腑抜けのようになって

いるので、みんな気味悪がって最近じゃあ放って置いてくれます」

「そうでしたか。実は奥さんにも似たような状態が起きているんです。

でも、奥さんは消滅して、この世界に戻って来れなくなって」

「そうだったんですか。よく分かりました。わたしは1週間、妻や子供のことを忘れず。もしうまくいったら、また教えに来てくれますか？

ゆきも、妻も連れて来てください」

「勿論です。必ず来ます」

監視が顔を出した。賢は念を押した。

「1週間ですよ。頼みましたよ。あなたの事はそれから挑戦します」

「おとうさん、頑張っってね。太郎や、信次には何も言ってないの。必ずまたお母さんと一緒に来るから、元気で頑張っってね」

「ゆき、ありがとう。内観さん、ありがとうございます。妻と子供たちをよろしくお願い致します」

ふたりは刑務所を出た。ゆきは涙を振り切り顔には笑顔が戻って来た。刑務所の門を出るとそこから大通りに抜けてタクシーを拾い、秋田駅に直行した。タクシーの窓から見える景色は雪景色だった。僅かではあつたが雪がぱらついていて。刑務所に向かう時はふたりの目には雪は見えなかった。その路肩の白が今、眩しく輝いて見えた。秋田駅に着いた時には12時半を回っていた。賢は時刻表を確認した。乗り継ぎの待ち時間が長く、今から2時頃までの電車ではどれに乗っても、遠野に着くのは5時半頃になりそうだった。そうになると急いで電車に乗る必要もなくなった為、遠野行きの切符を2枚購入してから駅前のレストランで昼食を摂った。レストランの壁の上方にテレビが設置されていて、ニュースを放映していた。賢はヘッドラインを見てはっとした。意識を集中して聞き入った。国会の空回りのニュースの後、鹿児島原智明研究会所長が失踪したというニュースになった。所長の失踪前に自宅に脅迫状が届いていたことで、誘拐事件の様相を呈して来ているとのことだった。その脅迫状の内容から、この事件が計画的な組織絡みの誘拐事件であるとの見方が強まっていると、ニュースキャスターが説明していた。脅迫状は「原智明の全ての資料のコピーを1週間以内に鹿児島市商工会議所に

送れ、後日それに相当する対価は我々の組織が支払う。言う通りにしない場合や、この手紙の内容を他に漏らした場合は、所長の命の保障はできない」という内容だった。ニュースでは説明がなかったが、賢は多分、所長がこの脅迫状を見ていなかったのではないかと思った。所長は何日間も事務所に籠もりきりで、滅多に自宅には戻らなかったからである。その送り先の商工会議所には荷物の到着を問い合わせる不審な電話が日に1、2度掛かって来ていて、電話を受けた担当者はいつも荷物が届いていないと応答していたが、所長が拉致されてからは、問い合わせはぷつぷつ途絶えたとのことだった。賢は原智明語録絡みの情報が不穏な勢力の手に渡った可能性があると思った。事態は容易ならない方向に向い始めたと思った。数馬から所長が失踪したと聞いてから、捜査の連絡があるかと思っていたが、これまで賢に対しては何の電話も無かった。何らかの連絡があれば、亜希子が知らせて来るはずだった。自分に捜査の手が及ばないということは、会員の名簿が盗まれてしまったからだろうと賢は思った。原智明の情報は先端科学に通じている者が見れば驚愕する様な内容だが、それが外に漏れることを恐れていた所長の他には、目黒の支部と自分、それに何人かの特別会員しか保有していないはずだった。あの所長が複数の会員に情報を開示するはずはなかった。賢はノートを取り出して原智明のページを開き、テレビが報道した脅迫状の内容を書き付けた。ゆきがじっと賢の行動を見つめている。賢がふとゆきの方を見ると、ゆきは顔を赤くして目を逸らせた。賢は次ぎに野岸孝子のページを開いた。〈調査項目〉の1. 人間関係の欄に、「夫は無実の強盗傷害の罪で懲役7年の判決を受け秋田刑務所に服役中XX年時点、5年経過。服役前にテレポーテーションの経験を持つ。服役中は意識のみの遠隔移動（幽体離脱）も体験している」9. 意識的側面の欄に「夫の野岸孝子や3人の子供達への執着心を11月XX日から1週間遮断。その間に帰還の瞑想を実施」と追記し、最後の〈省察〉の欄に、「帰還可能」と書き付けた。賢はノートをセカンドバッグに戻した。ふたりはレストランを出た。駅の構内に戻り、土産物店で太郎達と祐子達にきりたんぽを買った。ゆきは「自分も買う」と言ったが、賢は「一つを太郎達に」

と言ってゆきに渡した。賢がふとバス停に目をやると、一人の女性が乗車口を登りながら一旦立ち止まり、振り返って賢の方を見た。賢を見たのでないことは明らかだったが、賢の意識に麻子の姿が浮かび上がった。別れ際に振り返って賢を見つめていた寂しそうな瞳が現前し、賢の意識を捉えて放さなくなった。賢はゆきに少し待つように言い、10メートルほど離れた壁際に行って、麻子の家にスマホで電話を掛けた。呼び出し音が3度鳴って、麻子が電話口に出た。

「もしもし・・・」

「賢だ、元気にしているか？」

「賢さん・・・・・・・・・・」

麻子の声が途切れた。嗚咽を堪えている様子が手に取るように伝わって来る。

「愛子さんはどうしている？君は大丈夫なのか？」

「・・・・・・・・愛子は・・・転校しました・・・・・・・・わたし・・・・・・・・」

「どうした？」

「わたし、・・・直ぐに分かれました・・・・・・・・今は愛子とふたりで生活しています」

「同じ所に住んでいるのか？」

「・・・いいえ、小さなアパートに移りました。住所を言います。和歌山県岩出市・・・電話だけはもらいました。あなたから電話があるかも知れないと思って・・・待っていたの」

「生活は大丈夫か？」

「戴いたお金がまだ残っているわ。それに少しは貯金もあるの。来月からスーパーのパートで働くことにしたわ」

「身体は大丈夫か？」

「ええ、今は落ち着いているわ」

「働いても大丈夫か？スーパーのレジは1日中立ちっ放しだからきついぞ」

「大丈夫よ、今はとても安定しているわ。でも、あなたに会いたくて・・・・・・・・・・そんなこと言ったら罰が当たるわね。愛子が戻って来

たんだから」

「本当に大丈夫か？あの後、殴られなかったか？」

「……でも、大丈夫」

賢は咄嗟に、離婚する時、麻子は中川恭一に暴力を加えられたのだと覚った。

「来月から働くのは止めろ、いいな！今、金を送るから、後一月は静養してはくちや駄目だぞ、いいね！」

賢は麻子から銀行口座名と口座番号を聞き出した。

「……元気を出せよ。また会えるよ。無理するな。困った時は直ぐに連絡しろよ」

「はい……」

「それじゃ」

麻子が最後に応えた「はい」という言葉がやっと聞き取れるほどの小聲で、後ろ髪を引かれたが、賢は思い切って電話を切った。賢はゆきに、その場で待つように言うと直ぐに近くの銀行に行き、自分の口座から麻子の口座に30万円振り込んだ。時計は1時半を回っていた。賢は急いで駅に戻り、ゆきを連れて改札口を潜った。電車は既に到着していた。ゆきは不安の中にも期待があり、それに賢とふたりだけで居ることの喜びが加わって複雑な気持ちだった。電車の中ではできるだけ賢に寄り添うように意識したが、緊張して身体は動かさなかった。盛岡で乗換え、花巻で乗り換えて、遠野に戻ったのは5時半を廻った頃だった。駅の改札を出ると、祐子と亜希子の姿があった。

「お帰りなさい」

「お帰りなさい」

「亜希子さん、それに祐子さんもいらして頂けたのですか？」

「どうして、俺達の戻る時間が分かったんだ？」

「この時間しかあり得ないのよ。賢さんは必ず戻って来ると思ったわ」祐子が言った。

「そうか、君たちは頭の回転がいいな」

「お姉様が時刻表を調べて、必ずこの電車で戻って来られるっておっし

やったのです」

「そうか、祐子、流石だな。ところで亜希子さん、いつ着いたんだ？」

「お昼を少し回った頃です・・・賢さん、大変でしたね。野岸孝子さんのご主人にお会いできたのですか？ゆきさんも一緒だったのですね。辛かったですよ」

「うん、ゆきさんはよく我慢したよ。でも、久しぶりに会えて良かったよな」

「はい、今はもやもやが晴れた気がします」

「お父さんには、1週間ほど孝子さんやゆきさん達のことを意識から解放してもらった。これからゆきさんの家に行こう」

四人はタクシーに乗ってゆきの家に向かった。賢はタクシーの中で、きりたんぼをふたりに渡した。亜希子がそれを受け取った。

家に着くと、太郎と信次がいつものように飛び出して来た。ゆきは太郎にきりたんぼを「お土産よ」と言って見せてから、三人に居間に上がる様に促した。ゆきは三人を茶でもてなしてから直ぐに台所に戻った。賢はゆきの元気に立ち働く姿を見てほっとし、喜びが込み上げてきた。部屋には食欲を誘うサラダ油の臭いが漂ってきて、ゆきが天ぷらを揚げているのが分かった。三人はまたここで夕食をご馳走になることになった。ゆきの上げた天ぷらは衣が立っていて、食べるとさくさくと音を立てた。

「ゆきさん、ありがとう。帰って来たばかりで大変なのに」

「いいえ、皆さんと一緒に食事ができてわたしたち幸せです」

「今日は、きっといい結果が現れると思うよ」

「本当ですか？」

「うん、必ず成功すると信じるよ」

食事が済んでから暫くの間6人は談笑した。7時になった時、ゆきはニュース番組を見ようと言って居間にあるテレビを点けた。ヘッドラインの2つめに「原智明語録研究所の所長、拉致された模様」というタイトルがあった。祐子と亜希子が目を見張った。

「賢さん、鹿児島の研究会の所長さんのことでしょうか。数馬さんの言っ

ていた通りね」

亜希子が言った。

「うん、俺達も昼にテレビで見たよ。なあ、ゆきさん」

国会の空転のニュースに続いて、所長拉致のニュースが放映された。

「誰が拉致したのかしら」

祐子が言った。ゆきは三人の話している内容が理解できない風で、ただ三人に注意を集中していた。太郎と信次は食後のデザートとして出されている蜜柑を食べるのに夢中になっている。

「少し、込み入ったことになってきたようだ。いずれはこの問題に取り組まなくてはならなくなりそうだな」

「わたしもそんな気がするわ」

祐子が言った。亜希子には祐子の言った言葉の意味が、理解できなかった。15分ほどニュースが続いて、その後、コマーシャルになった。ゆきはテレビのスイッチを切った。賢がゆきの方を向いて話し始めた。

「ゆきさん、それに太郎君、信次君、今日も昨日と同じようにお母さんを呼ぶよ。これから暫くは心を落ち着けて。そう、ゆきさん、蜜柑を片付けてくれるかな」

ゆきは蜜柑を片付け、テーブルを布巾で拭ってから、蜜柑の籠と布巾を台所に持って行き、エプロンを外して戻って来た。部屋の暖房も切った。ゆき、太郎、信次の三人が並び、祐子と亜希子が縁側サイドに寄ってから、賢はテーブルを部屋の端に押し退けた。床の間に背を向けて、並んで正座している三人に直角の方向、祐子と亜希子の中間の前に座ると、再び話し始めた。

「準備はいいかい。今日はお父さんがお母さんを連れてゆくことはないよ。だからお母さんが君たちを抱き締めるまで呼び続けるんだよ、いいね。決して途中で声を出してはいけない。心の中でお母さんを呼び続けるんだ。直ぐ近くに来て、そのまま呼び続けるんだよ。心でだよ。いいね。さあ、これから僕の言う通りにして・・・先ず、軽く目を閉じて・・・今から、100回深呼吸をします。ゆっくり吸って・・・ゆっくり吐いて・・・吸って・・・吐いて・・・これから頭の中を空

にします。もう何にも見えません。そう、あなた達の頭は空っぽです・
・・・遠くに小さな光が見えてきます。ずっと遠くです。お母さんの
光です。さあ、心でお母さんをお呼びください。思い切り呼んで、ずっ
と呼び続けてください。光がだんだん近付いて来ます・・・・」
それから5分ほどして、賢は部屋が急に明るくなったのを感じた。亜希
子もその感覚を覚えた。部屋の真ん中が薄もやで包まれた様になって、
その中に次第に人の影が現れてきた。ゆきも太郎も信次も瞑想状態のま
ままんじりとも動かない。次第にもやが消え、一人の女性の姿がはっき
り見えたと思った瞬間、パッと消えた。賢、祐子、亜希子がビクビクし
ていると、突然ゆきが叫んだ。

「おかあさん！」

ゆきの叫び声とほとんど同時に、玄関を開ける音がした。一人の女性が
すっと居間に入って来た。女性はそのまま子供達の前に進み、ゆきの頭
を抱き抱えた。ゆきは声を上げて泣いた。太郎と信次も目を開けると、
野岸孝子に抱きついて声を上げて泣いた。孝子は子供達を抱きしめて、
立ち膝のままボーッと掛け軸を見つめている。5分間ほど親子は抱き合
ったままだった。孝子はゆきと同じくらいの背丈の優しくそうな女性だっ
た。顔はどちらかというとな太郎に似ていて、やや面長な、目の大きな女
性だ。子供達を抱きしめながら、まだ自分が何をしているのか認識でき
ていないようだった。祐子と亜希子の目にも涙が浮かんでいる。賢が静
かに口を開いた。

「野岸孝子さんですね」

「・・・は、はい・・・」

「ゆきさんや太郎君、信次君が分かりますか？」

「勿論です、わたしの子供達ですもの。ところで、あなた方は一体どな
たですか？」

賢は孝子の意識が戻ってきているのを理解した。

「あなたは、家の前の自家用車の中で突然消えてしまったのです。そし
て、今、お子さん達に呼ばれて戻って来ることができたのです」

「えっ！わたしは何をしていたのかしら。今、お醤油とお砂糖を買いに

出掛けただけけど・・・一寸ぼーっとして、そしたら、なぜか急に子供達が呼んでいる様な気がして、急いで戻って来たのです。なんか頭がぼーっとして、まだ考えが良くまとまりませんが」

「ゆきさん、台所から蜜柑を持って来て」

賢がゆきに向かって言うと、祐子が立ち上がりながら言った。

「わたしが持って来るわ」

賢は祐子が差し出した籠から蜜柑をひとつ取って、孝子に近付き手渡ししながら言った。

「これを食べて、この空間に戻ったことをしっかり自覚してください」
孝子は何を言われているのか分からないまま、蜜柑を手にとるとそれを剥いて、一粒ずつゆっくり袋を剥いて食べた。三人の子供は涙も拭かずにその姿をじっと見つめている。半分ほど食べてから、孝子は太郎と信次の頭を撫でて微笑んだ。

「母ちゃんが笑った」

「笑ったぞ」

太郎と、信次が大きな声で叫んで飛び上がった。ゆきは再び孝子の胸に頭を埋めて泣いた。孝子はその頭を自分の胸に引き付けて、強く抱き締めた。

「わたし、どうしたのかしら。失礼ですが、皆さんはどうしてこちらにおいでなのですか？」

「申し遅れましたが、わたくしは内観賢と申します。この二人はわたくしの友達の崎野祐子さんと藤代亜希子さんです。わたくしたちは、あなたの失踪問題を解決しようと、ゆきさんや太郎君、信次君と一緒にいろいろ挑戦してきたのです。今日、やっとあなたの帰還が実現しました。あなたは体質的に不安定なところがあって、意識の持ち様でこの世界から消えてしまう可能性があるのです。今、ここにこうして戻って来ることができましたから、もう、2度と消えないように注意してください」
「えっ！わたしが、この世界から消えていた？・・・本当に？・・・どの位、この世界から消えていたのですか？なんか、急に寒くなったように思いますが」

「1年3ヶ月ほどです。暫くはご主人のこと、仕事のことから意識を切り離して、子供達のことのみを思っていてください。今、ご主人や、仕事のことを考えると危険です。また、消えてしまう危険性があります。ゆきさんはとてもしっかりした娘さんです。あなたがおられないとき、一人でこの家を支えてきました。ゆきさんを抱き締めてあげてください。きっと、苦しさを押し殺して頑張ってきたと思います。今日は皆一緒の部屋に寝てください。太郎君、信次君、お母さんがどこかに行かないようにしっかり捕まえていてくれよ」

「賢お兄さん、まかしとけよ。おれ、母ちゃんを絶対放さないから」

「おれも放さないぞ」

ふたりが孝子のスカートの裾をしっかり握ったのを見て、祐子と亜希子はくすくす笑った。賢はふたりの子供たちの行為はまんざら無意味ではないと思った。ゆきは母の胸に抱かれてまだ啜り泣いていた。10分ほどして漸くゆきは泣き止んだ。

「今日はこれで失礼します。明日10時頃にこちらに伺います。それから今後のことを話し合しましょう。まだ警察には連絡しない方がいいでしょう。今日は親子水入らずでゆっくり休んでください。お母さんは、できるだけ食べ物を食べたりお風呂に入ったりして、この世界のことには接してください」

賢はゆきにタクシーを頼んでもらい、三人で野岸家を出た。玄関から出ると、駐車場に孝子のものと思われる車が駐まっていた。賢が近づいてみると、康介の言っていた位置にまるで決められたように停めてある。ゆきともう一人の女性の笑い声が聞こえてきた。三人は「孝子さんの笑い声だ」と思った。

ホテルに戻ると、三人は先ずホテル内のカフェに寄った。

「祐子、亜希子さん、ありがとう。こんなにスムーズにゆくとは思わなかった。ご主人が協力してくれたおかげだ。あの三人の意志が完全に一致して母親を呼んだんだな」

「賢さん、わたくしとっても感動しました。野岸孝子さんが戻られた時、部屋がパッと明るくなって、わたくしも身体が熱くなるのが分かりまし

た」

「わたしは光は感じなかったの。でも、ゆきさんの感動が伝わって来たわ。ゆきさんの涙が流れたとき、わたしも涙が流れたわ」

「凄かったな。孝子さんの子供への気持ちが思った以上に強かった。ご主人への心配心はご主人の側が切り離してしてくれたから、繋がらなかったんだな。きっと彼女は心が純粹なんだ。だから一直線に子供達の元に現れたんだ」

「賢くん、明日はどうするの？」

「うん、先ず孝子さんの健康状態を確認して、大丈夫そうだったら、孝子さんを連れて警察に行こう。それから、孝子さんの働いていたスーパーに挨拶に行って、保険会社に復帰の連絡を入れる。明日はそんなところかな。そして明後日、俺は孝子さんを連れてもう一度秋田に行って来るよ」

「わたしも一緒に行きたい」

「わたくしもご一緒させて頂きたいわ」

「いや、君たちは子供達を見守ってやって欲しいんだ。それに、多分テレビ局や新聞社が押し寄せるだろうから、そっちの対応をして俺たちの行動を誤魔化して欲しいんだ。難しいけれどね」

「分かったわ、やってみる」

「祐子お姉様、何かいい方法があるかしら？ 帰還して直ぐに行方が分からないんじゃ、記者達はムキになると思いますわ」

「亜希子さん、わたしに任せておいて。孝子さんはこの日は誰にも会えないということにしたらいいと思うのよ。家に居るような雰囲気を作るけど、家に居るとは言わないの」

「どうすればいいのかしら」

「亜希子さん、あなたは顔を知られているから、孝子さんの家に籠もってくださらない？ わたしが記者達やそのほか、来客に対応するわ。子供達の世話もあるしね。そして、賢さんと孝子さんが戻って来たら、そのタクシーでホテルに戻るの。後で騙されたと分かっても、記者には何も言えないようにすればいいのよ」

「祐子はよく頭が回るな。それじゃあ、俺たちが秋田から戻って遠野の駅に近付いたら電話するよ」

「分かったわ。後は首尾良くやることだけね。亜希子さん、大丈夫？」

「はいお姉様、大丈夫です」

「それじゃあ、今日はゆっくり休んで、明日7時に下のレストランで会おう」

三人は一緒にエレベータに乗った。祐子と亜希子は4階で降りた。賢は5階の自分の部屋に戻り、ベッドに身を投げ出した。暫くして、ドアをノックする音がした。

「あなた、来ちゃったわ」

「祐子、亜希子さんが気付くぞ」

「大丈夫よ、音を立てないように来たから」

賢は祐子を迎え入れるとドアをロックした。祐子は賢に抱き付いた。ふたりは暫く抱き合っけて口づけを交わしていたが、纏れ合うように一緒にベッドに身を横たえた。賢が祐子の胸のボタンに手をかけた時、電話のベルが鳴った。亜希子だった。

「賢さんですか？今から伺ってもいいですか？一寸お願いがあるので」

「うっ、うん、いいよ」

賢が電話を切ると祐子が言った。

「亜希子さんでしょ。来るって言ったの？」

「うん。祐子、暫くの間シャワールームに隠れていてくれないか？」

「その方が良さそうね。いずれ、かち合うことは分かっていたんだし」

祐子がシャワールームに隠れてから、少しして亜希子がやって来た。賢がドアを開けて亜希子を招き入れると、亜希子は一言も発さずにいきなり賢の胸に飛び込んで来た。賢は亜希子を抱き止めた。

「亜希子さん、どうしたの？話って？」

「賢さん、昨日は祐子さんと一緒だったのでしょ。わたしを抱き締めてください。そうして頂かないと、わたくし気が狂ってしまいます」
賢は暫く、亜希子を抱き締めていた。そして、亜希子の両肩を掴んで静かに引き離して言った。

「亜希子さん、祐子も泊まっているんだから部屋に戻ろう」

「いやです。このまま抱き締めていてください」

亜希子は勇気を振り絞って言ったに違いなかった。亜希子は再び賢に身体を預けてきた。

「亜希子さん、君の部屋に行こう。ここには祐子も来るし」

「……はい」

亜希子の手を取って外に出ると、賢は外からドアをロックした。亜希子の部屋に着くと、亜希子が手を振るわせながら鍵を開けるのを待って、賢は亜希子の後につき、部屋に入ると直ぐドアをロックした。亜希子がベッドの脇まで行き賢の方を振り返ると、賢は亜希子を抱きしめ、唇に口づけをした。亜希子は手に持っていた部屋の鍵を落として、膝がガクッとふらついた。亜希子にとって生まれて初めての経験だった。亜希子の瞳はトロンとして、身体の力が抜けた様になっている。賢は亜希子の身体を離しながら言った。

「亜希子さん、今は失踪事件の解決に集中しなくては……」

亜希子は黙って頷いて、再び賢にしがみ付いた。賢は亜希子を放して額に口づけすると、亜希子の部屋を出た。自分の部屋に戻るとベッドの上で祐子が入って来た賢をじっと凝視している。

「亜希子さんを部屋に送って来た」

「亜希子さんは何しに来たの？」

「一緒にいたいって」

「わたしも部屋に戻るわ。部屋まで送って行って」

祐子の部屋は亜希子の部屋の隣だった。祐子は音がしないように静かにドアを開けた。賢が中に入ると、自分が後から入って静かに締め、ドアをロックした。祐子は奥の窓まで行ってカーテンを閉め、再び賢のところまで戻って来て賢に抱きついた。賢は声を押し殺して言った。

「祐子、ごめんね」

「ううん、あなたの所為じゃないわ。あなたを独占したいわたしがいけないのよ。でも駄目なの、どうしてもあなたを求めてしまうの」

囁くように応えると、祐子は再び賢を抱き締めた。賢も祐子を強く抱い

た。ふたりは口づけを交わした。賢はひそひそ声で

「祐子、今日も素晴らしい日だった。きみと一緒にいられたから。明日も大切な日になるな。あまり表面に出ないようにしよう」

「分かっているわ。あなた、愛してるわ」

最後の部分をやっと聞き取れるような小声で言うと、祐子は賢から離れた。賢は音が響かないように気を遣いながら祐子の部屋を出て自分の部屋に戻り、3階の大浴場に出掛けた。二人の老人が入浴していたが、賢は湯船の中で一日の省察を行った。特に野岸孝子が戻って来た時の情景を時間を遡って逆に辿って行った。ゆきの感情の流れが手に取るように見えてきた。孝子が現れた時から賢達が暇乞いをするまでゆきは泣き続けていた。胸の中で渦巻いていた苦痛の淀みが怒濤の如く流れ出して解放されたようだった。孝子の夫が感情を幽閉している様子が見えてきた。早く解放してあげたいという思いで一杯になった。翌朝、7時頃三人はレストランに降りて来た。賢がテーブルに着くと、間もなく祐子がやって来た。

「おはよう！よく眠れたわ。昨日はここの夕食、食べられなかったけど、地元の食材を使っているようでおいしそうよ。今日は是非頂きたいわね」

「そうだな。今日はきっとゆっくりできるよ」

少しして亜希子が現れた。亜希子は賢と視線が合うと、直ぐに目を逸らせた。

「おはようございます！気持ちの良い朝ですね。川辺の朝露が輝いていてとっても綺麗でした」

「おはよう！」

「おはようございます！」

賢と祐子は同時に挨拶した。祐子の軽やかな挨拶の余韻が、三人の周りに穏やかな雰囲気を作り出した。ウェイターが来たので三人は和食の注文をした。ウェイターが去ると賢が言った。

「今日は、先ず野岸さんの家に行って状況を確認しよう。それから孝子さんを連れて警察に行く。その後でスーパーに行って挨拶をする。それ

だけにしよう。ゆきさんには直ぐに保険会社に連絡させよう。孝子さんの住民登録は有効なままだと言っていたから、そのほかの手続きは必要ないはずだ・・・愛子さんの時といい、今回といい、どうも時間が加速してきているようだ。慌てずに、しかし急ピッチでことを進めなくてはならない」

「時間が加速してきているって、どういうこと？」

「普通は意識が働き始めてから、その効果が現れるのに、場合によるけど1年とか2年とか、時には10年も20年も掛かる。人の意識に働き掛ける場合も、その変化を実現するには、少なくとも1ヶ月くらいは掛かる。しかし、特殊なケースとはいえ、愛子さんも孝子さんも意識の働き掛けで直ぐにその影響を受けて結果が現れた。孝子さんのご主人の意識の影響もそうだ。時間が加速していると言うより、意識の作用が働き易くなってきたと言い直した方がいいのかも知れないけど、いずれにしても直ぐに結果が得られるようになった。ということは、逆に慎重でなければならないということだ。純粹意識を持って働き掛けないと、危険な状態を招来してしまうかも知れないんだ。だから今日は事務的な事を進めるだけにして、孝子さんやゆきさんの凝縮した意識を解放するように指導しよう」

「意識の作用って凄いのですね」

亜希子が言った。

「うん、ふたりとも最近の高齢化社会の現実を知っているだろう。それがいい例だ。医療費が高騰して、高齢者の医療費負担が増えて、社会が暗いイメージに変化してきているように感じるだろう。これは日本中ほとんどの地域で、高齢者に対する意識が「年を取ると、身体が変調をきたし、健康障害が増え、働くこともできなくなり、看護が必要になる」という固定した概念になってきていることが原因なんだ。「若者は元気一杯で、いくら働いても健康だ」と思っている。「高齢者になると働けなくなる」と思い込んでいる。地域だけじゃなくて、個人個人も同じ意識を持ち続けている。この意識の下では、高齢者は身体を動かすのを敬遠するようになり、身体が少し痛いと感じただけで直ぐに病院に行く。

病院では医師が肉体的な異常を探し出して、その部分に対し処方しようとする。高齢者自身の意識がそうなっているから、彼らの身体もそれに同調して悪化してゆく。聞いたことあるかもしれないけど、ある地域では高齢者が働く環境を整備して、組織化を行って、いつまでも働けるようなシステムを作ってしまったんだ。実際に高齢者が働き始めてから、その翌年には医療費が30ポイント以上も減少したということだ。一方で、介護の完全化を図っていわゆる高齢者に優しい街づくりをした地域では、医療費がアップして、その地域の財政を圧迫して個人の医療費負担が膨れ上がり、町中が病人だらけになってしまっているようだ。こういう事実があるのに、まだ病人の増加を統計的な計算から予想して、「ベッドの数が足りない、医師の数が足りない、補充せよ」といかにも理論的根拠に基づいていると主張する政治家や行政組織が多いんだよ。残念なことだな。人間の力はそんなに虚弱なものではない。意識の力は原子力より強力なのを誰も気付いていないんだ」

賢の語調が次第に強くなってきたので、祐子は気になって辺りを見回した。20人ほどの人たちが食事をしていたが、誰も気にしている様子はない。祐子は「皆聞こえているはずなのに、知らんぷりしているわ」と思った。ウェイターが三人の食事の載った膳を運んで来た。三人とも心地よい空腹感を抱いていたので、配膳された味噌汁と御飯の香りを思い切り吸い込んだ。

三人がゆきの家に着いたのは8時半頃だった。呼び鈴を押すと、直ぐにゆきが出て来た。

「おはようございます。みなさん、昨日は本当にありがとうございました。母はとっても元気です。太郎や信次も元気よく出掛けました。今日も、わたしお休みを頂きました」

ゆきに促されて三人が居間に上がると、孝子が台所の方からエプロンで手を拭いながら現れた。交代でもする様にゆきが台所に消えた。

「おはようございます。みなさん、昨日は本当にありがとうございました」

孝子は茶と急須を盆に載せて来て、座卓の上に置いてから、茶托に載せ

た湯飲みを一つずつ取って、順に三人の前に出した。

「おはようございます。もう意識ははっきりしましたか？」

「はい、もうすっかり良くなりました。内観さんのおっしゃるように、昨日は娘と一緒に風呂を頂き、みんな一緒に床に入りました。ゆきったら一晩中わたしの手を握っていたんですよ。太郎と信次も交代でもう一方の手を取り合って握ってくれました。わたし、この子達を授けて頂いたことを心から神様に感謝しました」

「僕たちも、とても嬉しいです」

祐子と亜希子も頷いて微笑んだ。ゆきが入って来た。

「お母さんたら、昨日はお風呂の中で子供みたいだったんですよ。わたしにお湯を掛けたりして。背中も流してくれたんですよ。10年ぶりです。わたしも流してあげたの。まるで、わたし、幼稚園児に戻ったみたいな気分になっちゃった」

その時、奥の部屋で電話のベルが鳴った。ゆきが立って奥の部屋に行った。暫くして、ゆきは戻ってくると、

「信次の担任の先生からなの。お母さんが戻って来たって本当かって聞いたの。昨日戻ったって応えたら、直ぐに校長に連絡するって。後で、家に来るって言ったから、警察に行くから3時過ぎにして欲しいって応えたわ」

その時、また電話が鳴った。ゆきが小走りで奥の部屋に入って行き、直ぐに戻って来た。

「警察からよ。学校から連絡を受けたけど、お母さんが戻ったのかって。そうだって応えたら、後で出頭してくれって」

「警察に連絡が行ったとすると、午後には報道陣で一杯になるな。最初に警察に行きましょう。それから、孝子さんのスーパーに挨拶に出掛けて、今日は報道陣を避けてゆっくりしましょう。できるだけ緊張しないように意識を解放してください」

「はい、皆さんも一緒に行ってくださいませんか？」

「はい、今日はみんなあなたと一緒に行動します。ゆきさんも一緒の方がいいでしょう。そして、明日はわたしと一緒に秋田に行きましょう。」

その間、報道陣を避ける為に、少しカモフラージュしてください」

「わかりました。わたしも主人に会いたいと思います。1年以上行ってなかったことになりますから、主人はきっと心配していると思います」

「はい。ご主人も、とてもあなたやお子さん達に会いたがっておられます」

ゆきが、涙を浮かべて言った。

「わたしも連れて行ってください」

「ゆき、あなた、お父さんのこと知っているの？」

「うん。おかあさん、わたし前から薄々知っていたわ。それに、昨日内観さんに秋田まで連れて行って頂いたの。お父さんに会ったわ」

「そうだったの・・・内観さん、明日ゆきも連れて行きたいと思いますが」

「一緒に行きましょう。15分間、一寸短いですけど、お父さん喜びますよ」

賢は昨日、祐子や亜希子と相談した手順を説明した。孝子とゆきは面白いと言って声を上げて笑った。賢は何処が面白いんだろうと思った。ふたりが本当は朗らかな性格なのだと思い直した。5人がタクシーで警察署に着くと、受付には既に大勢の警察官が集まっていて、先ず、健康状態を尋ねられた。孝子は正常だと応えた。それから孝子は一人の婦警に引率されて、医務室に向かった。孝子が去ると、4人は直ぐに会議室に通された。ゆきが何度も事情聴取を受けたことのある4、5人の警察官に軽く頭を下げた。警察官達は皆軽く微笑んだ。孝子用の席を中心に空けて右にゆきと賢、左に祐子と亜希子が並んで座った。50人ほどの警察官が4人に向かって座り、その中の一人が代表して話し始めた。

「お越し頂いてご苦労様です。ただいまから野岸孝子さんの帰還についての連絡会を開催させていただきます。まず、4人の方々に自己紹介をして頂きます。その後で、代表の方から野岸孝子さんが帰還された経過を説明して頂きたいと思いますが、よろしいでしょうか？」

4人は頷いた。司会者の指示に従って、4人は簡単に自己紹介をした。ゆき以外はゆきの友人として紹介した。賢と亜希子は鹿児島での失踪の

経験があると付け加えた。警察官の間にどよめき起きた。自己紹介を終えると賢が経過を話し始めた。

「先ほど自己紹介致しましたように、わたくしはゆきさんの友人の内観賢です。経過を説明する前に、どうしてわたくしたちがこの事件に拘わっているかを簡単に説明致します。わたくしとここにいる亜希子さんは、1ヶ月半前に鹿児島で失踪し、生還した経験を持っています。わたくしたちは以前から、失踪事件に興味を持っていて、鹿児島の原智明さんの失踪事件を調べている間に自分たちも失踪してしまいました。失踪から1ヶ月後に、ここにいる祐子さんと亜希子さんのお母さんのご尽力の結果、無事帰還できたのですが、その時の経験を、以前一度野岸孝子さんの失踪を調べにこちらに伺った時に友人になった、ここにいる野岸孝子さんの娘さんのゆきさんにお話して、条件さえ揃えば、野岸孝子さんが帰還可能なことを説明しました。そしてその条件設定を行い、昨夜無事野岸孝子さんが帰還できたという訳です。この出来事は事件と銘打たれていますが、実際には刑事事件ではなく、個人的な失踪と帰還の出来事です」

警察官の中から、何度もどよめきが聞こえた。

「全体の経過は今ご説明頂いて分かりましたが、どのように帰還したかを詳しく説明して頂けますか？」

「はい。多分皆さんには理解して頂けない部分もあるかも知れませんが、わたしはありのままを話します。わたしは自分と亜希子さんの失踪から帰還までのプロセスを顧みて、今回の失踪は人間の意識の問題だということを理解しました。つまり、意識をコントロールすることで、人間は現在居る場から、別の場に移動することができることが分かったのです。これは量子の世界では当たり前のことですが、それが量子の集まりの全体である人間としても実現できることが分かりました。また、その反対に、意識をうまく作用させることで、別の場に行ってしまった人間をこの場に戻すことができることも分かりました。それで、娘さんのゆきさんと二人の息子さんの太郎君と信次君と一緒に意識を作用させてもらったのです。そしたら、野岸孝子さんが消えた時の場所に自動車と

一緒に現れました。ただ、意識を誤って使うと悲惨な結果を招く恐れがありますから、周到な準備と細心の注意が必要なのです。ですから、わたしはゆきさんを伴って現在、無実の罪で・・・これはわたしがそう信じているのですが、・・・無実の罪で服役中の野岸孝子さんのご主人の処に向いて、暫くの間野岸孝子さんへの意識的な関与をしないように頼んだのです」

警察官の中には、賢の説明にあからさまに反発する態度を表した者もいた。あちらこちらでひそひそと囁き合っている。司会者が話し始めた。「このことは、ここにいらっしゃる4人の方、全員が認めることでしょ
うか？」

「その通りです」

祐子が言った。亜希子もゆきも祐子に続いて肯定した。

「失踪からの帰還についての報告は以上と考えてよろしいですか？」
賢が応えた。

「はい、以上です。ゆきさんも野岸孝子さんも大変疲れていますから、早く自宅に戻って休養した方がいいと思います」

「それでは、皆さんの中から何か質問はありますか？」

一人の警察官が挙手した。司会者の許可で話し始めた。

「内観さん、あなたのおっしゃることは、現在の科学では認められていない内容です。そういうことが現実に起きたとは考えられません。何か事実を隠していませんか？それに、1週間前に起きた原智明語録研究所の所長さんは現在行方不明になっています。あなたは、原智明さんの失踪を調査する為に鹿児島に行って、自分も失踪したとおっしゃいましたが、何か所長さんの失踪事件に拘わっていませんか？」

「いいえ、確かにわたしも原智明さんのことを調べている途中で、原智明語録研究会の存在を知って会員になりました。でも、所長さんが失踪されたときは、わたしや祐子さん、それに亜希子さんも東京に居ました」
司会者が間に入った。

「鹿児島の事件については、鹿児島県警が調査していますので、この場ではこれ以上その件には介入しないでください」

婦警に引率されて孝子が入って来た。孝子はゆきの方を見て会釈すると、自分の席と思われる中央の席に腰掛けた。司会者が孝子に向かって話し始めた。

「野岸孝子さん、無事の帰還おめでとうございます。お疲れのところを申し訳ありませんが、失踪した時から帰還された時までの状況と経過を、分かる範囲で結構ですから説明して頂けますか？」

「はい・・・わたしは、去年・・・自分では去年とは思えませんが・・・去年の8月25日の夕方、仕事から帰って、一旦家に入り夕食の支度をしていましたが、醤油と砂糖が無くなってしまっていたのを思い出して、それを買いに車で出掛けようと思いました。エンジンを掛けて近くのスーパーに行こうとした時、意識が無くなってしまいました。はっと気付くとわたしは車の中に居ました。車のエンジンも掛かっていました。わたしは、子供達が呼んでいるような気がしましたので、エンジンを切って、一旦家に戻りました。その間も頭がぼーっとしていて、意識がはっきりしませんでした。玄関のドアを開けて居間に入ると、そこには三人の子供が並んで座っていて、ここにいらっしゃる内観賢さん、崎野祐子さん、藤代亜希子さんがいらっしゃいました。わたしは何が起きたのか分かりませんでした。ゆきの所に行くとうきがかじり付いて来て泣き出しました。わたしは、ゆきと息子達の頭を撫でてやりました。その時、内観さんのお話で自分が1年以上失踪していたことを知りました。それだけしか説明できません。全部本当のことなのですが、1年と3ヶ月あまりの間のわたし自身のことは全く分かりません」

場が静まり返った。全員、一言の言葉も発することができなかった。少し時間を置いて司会者が話した。

「どなたか質問がありますか？」

一人の年輩の男性が挙手して言った。

「自家用車は今お宅にあるのですか？」

「はい、元の位置にそのままあります」

「あとで皆さんを家まで送りますので、その時拝見させてください」

野岸孝子の帰還に関する報告会はそれで終わった。先ほど年配者が言っ

たように、若い警察官が2台のパトカーで全員を野岸家まで送り届けてくれることになった。自宅に着くと既に隣組の主婦達が大勢集まっていた。皆それぞれに、「無事でよかった」「おめでとう」などと孝子に話し掛けてきた。野岸孝子とゆきはいちいち「ありがとうございます」と応えながら人を掻き分るようにして家の中に入った。賢達三人も後に続いた。三人が居間に入ると、50代と思われる二人の主婦が玄関から上がって来て台所の方に行った。その後から、一人のまだ年端の行かないおかつぱの女の子が主婦を追うように台所の奥の方に小走りで行って行った。孝子が二人の主婦と何か話している。暫くして二人の主婦がぶつぶつ言いながら玄関を出て行った。警官がパトカーから降りて自家用車の周りを見て廻っている。孝子が居間に入って来て言った。

「近所の人たちが来てくれたんだけど、「少し休みたいから」と言って引き取ってもらいました」

「そう、それがいいでしょう。少し休んでからスーパーに行きましょう。その間にゆきさんは保険会社に電話を入れた方がいいでしょう」

丁度部屋に入って来たゆきの方に向きを変えて賢が言った。ゆきは直ぐに奥の部屋に入って行った。警察官が玄関に来て、車の鍵を借りて行った。10分ほどしてゆきは居間に戻って来ると、ABC保険の担当者と話した内容を説明した。孝子が戻って来たことを告げると、担当者は儀礼的な祝福の言葉を言った後、保険金支給の打ち切りの説明をした。後で書類を送って来るとのことだった。賢は、保険会社との話が拗れずに済みそうなのでほっとした。実際保険会社の従業員も業務として処理を行っているので、既に支払い済みの保険金についてまで言及しないのだと賢は思った。孝子が5人分の茶を入れて盆に載せて持って来た。全員、やっと一息ついた。やがて、警察官が自動車の鍵を返しに来た。時計の時間が狂っている他には、特に変わったところもなかったと言っていた。賢はやはりそうかと思った。5人は暫く無言で茶を飲んだ。賢はスマホのバイブレーションを感じた。マナーモードにしていたので誰も気付かなかった。賢は立ち上がると、玄関の上がり口に行き行って通話ボタンを押した。鹿島康介からだった。

「賢さん、野岸孝子さんが戻ったの？」

「ええ、昨夜帰還したんです」

「直ぐに教えてくれればいいのに」

「済みませんでした。いろいろ立て込んでいて、明後日お会いして詳しく説明します。鹿島さん済みません、明日は急用ができてしまって」

「分かってるっすよ。じゃ、明後日の昼に・・・それで、野岸孝子さんは車で戻って来たの？」

「はい」

「突然現れた・・・ってわけ？」

「ええ」

「賢さん、今、車の廻りと、轍の辺りの写真を撮っておいて。車を動かさないで」

「分かりました。それじゃあ、明後日の12時に駅前でお会いしましょう」

賢は居間に戻ると、写真を撮る為に祐子を連れて自動車の処に行った。車のタイヤと轍を見て、鹿島康介の鋭い感覚に感心した。タイヤの前後に付いている轍は、今車が戻って来たばかりの様にぴったりタイヤに合っていた。祐子はデジカメを取り出して、賢の指示に従って写真を撮った。車は昨日帰還してから動かしていない。警察官も車内を見ただけだと言っていた。何より不思議なのは轍の土が乾燥して硬くなっていることだった。今走ったのでは、こんなに硬い土の轍が出来るはずはなかった。失踪した場所に戻るとき周りの環境も同時に戻っていたのだと賢は思った。そして、その後、直ぐに今の環境に順応した。そう考えるのが一番自然だと思った。「やはりものだけが消滅したのではない、場も変化したのだ。時空が変化したのだ」賢は確信に近い感覚を抱いた。

1時間後に5人はスーパー花巻に着いた。孝子は自分で乗用車を運転した。帰還したときガソリンもそのまま残っていた。時計は鹿児島での失踪時に賢が体験したように、凡そ1時間遅れていた。家を出る前に、孝子は家の周りを慣らし運転してみた。車の調子は失踪前と何ら変わったところがなかった。賢は孝子の車に同乗した。賢が助手席に座り、ゆき

を後部座席に座らせた。祐子と亜希子はタクシーを使った。家を出る時は、幸い隣組の主婦の姿は無くなっていた。どうやら孝子が「休みたい」と言ったのが功を奏したようだった。ゆきに続いて全員スーパーの裏口から事務所に入った。孝子は全く普通の通勤の様に何の遠慮もなく事務所に入って行った。事務所のドアの開く音に店長と男性の事務員が振り返った。ゆきとその後ろに控えている孝子の姿を見て、店長は顔をぐっと上げて目を大きく見開いた。事務員の男性は立ち上がって店長の横に来た。

「野岸さん、無事だったのですか？」

「はい、おかげさまで昨日戻ることができました」

「どうしてたんですか？みんな心配していましたよ」

「僕たちも、野岸さんがいなくなってしまうと、一時仕事が廻らなくなっちゃいました」

「意識的な問題で、消えていたようなのです」

孝子が言うと、少し怪訝な顔をして店長が言った。

「えっ？何ですか？消えていた？・・・どこに？」

「一寸分にくかり難しいでしょうが、あとで時間をみて説明します」

「ゆきさんが、良くやってくれていますので、助かっていますよ。あなたはいつから来られますか？」

「復帰させて頂けるのですか？ 帰りに、派遣会社に寄って行きますので、派遣会社の方からご連絡致します」

「うちは、明日からでもいいですよ。でも、きりのいいところで12月からということはどうですか？一番忙しい時で済まないけど」

「そうさせて頂ければ助かります」

孝子は深々と頭を下げた。店長がマイクを使ってゆみという店員を呼び出した。賢は「この間会った店員だ」と思った。孝子には昨日会ったばかりというような感覚があり、特に久しぶりに会うという感慨を表情に顕わさなかったが、事務所に入って来たゆみは孝子を見ると、目に一杯涙を浮かべて孝子の手を握り締めながら言った。

「野岸さん、無事だったのね。良かったね、ゆきさん、お母さんが戻っ

て嬉しいでしょう」

ゆきは頷いた。ゆみは仲間がどうした、こうしたという世間話を孝子に話していたが、孝子は「うん、うん」と頷いているだけだった。店長が、

「ゆきさん、和田さん達に交代で事務所に来るように、伝えてください」と言うと、ゆみは孝子の手を放し店に戻って行った。戻る時賢に気付いた模様で、軽く会釈した。ゆきが後を追った。暫くしてゆきはビニールバッグを提げて、一人の従業員と一緒に戻って来た。それから従業員が5人ほど、入れ替わり立ち替わり現れて孝子とゆきに言葉を掛け、祝福して職場に戻って行った。孝子とゆきは店長と事務員に礼を言ってから事務所を出た。祐子がスマホでタクシーを呼んだ。祐子は旅行に出る時は必ず予めその地域のタクシー会社の電話番号を調べてある。タクシーは直ぐに来了。タクシーの到着を待って、孝子が車をスタートさせた。派遣会社の事務所には10分ほどで着いた。そこでも孝子は淡々と挨拶をして、12月からの復職を決めた。復職と同時にスーパー花巻に派遣されることとなった。派遣会社を出た時は既に12時30分を回っていた。

「食事をしよう。野岸さん何が好きですか？」

「わたしは何でも好きです。ゆきの好きなお肉のお店でいいかしら」

「お母さん、わたしはいいのよ。お母さんが戻って来たんだから、お母さんの好きなものを食べようよ」

「それじゃ、久しぶりにステーキを食べようか？皆さん、よろしいですか？」

「おかあさん、ステーキはこの間内観さん達にご馳走して頂いたわ。とってもおいしかったわ。だから、今日はお母さんの好きな、パスタのお店に行こうよ。祐子さん、亜希子さん、わたしたちの希望ばかり言ってごめんなさい」

「ううん、わたしもパスタは大好きよ」

「わたくしも、大好きです」

祐子も亜希子も同調した。賢が言った。

「野岸さん、美味しいパスタの店に連れて行ってくださいますか？」

「はい、分かりました。わたしの後に続いてください」

孝子がそう言うと、三人は車に乗った。祐子と亜希子は待たせておいたタクシーに乗り込んだ。孝子はそこから5分ほど走り、パスタ専門店・シチリアという看板の掛かった店の駐車場に車を停めた。

「この店は良く来た店です。烏賊墨のスパゲティが美味しいんですよ」と孝子が嬉しそうに言った。店はこじんまりとしていて、周りには柵の木が植えられている。そのためか室内が薄暗く、外から窓の中を窺うことはできなかった。木で出来た扉を引くと、ちりんちりと鈴が鳴り、カウンターにいたマスターが「いらっしゃい」と言った。店の中には一番奥に大きな丸テーブルがあり、角テーブルが5席あった。カウンターは5メートルほどの長さで内側に仕切があり、その奥で調理をするようになっている。マスターが目を丸めて孝子を見つめている。孝子のはるか会釈した。ウエイトレスが5人を一番奥のテーブルに案内した。孝子は烏賊墨のスパゲティ、ゆきはミートソース、賢達3人はカルボナーラを頼んだ。少しして、マスターが5人分の水のグラスとピッチを持ってやって来た。

「いらっしゃいませ。野岸さん、ご無事でしたか？」

「ええ、おかげさまで、無事帰ることができました」

「おめでとうございます。また、ご^{ひいき}最^き願^いいます」

そう言って去ると、少ししてウエイトレスが大きなガラスのサラダボールに一杯に盛った生野菜のサラダと取り皿、ホークを持って来た。サラダにはイタリアンドレッシングが掛かっている。女性たちはほくそ笑んだ。

「マスターからの差し入れです。どうぞ召し上がってください」

孝子が礼を言った。そしてカウンターのマスターの方を向いて軽く頭を下げた。マスターは会釈を返した。賢は孝子が日常の生活に戻っていると思った。孝子にとっては時間が1年3ヶ月後にスリップしただけなのだ。シチリアは孝子が支払った。賢が支払いを申し出たが、どうしても自分が支払いたいと言って聞かなかった。三人は孝子に礼を言ってシチ

リアを出た。外は空気が冷たく、祐子と亜希子は思わずコートの襟を立てた。祐子が呼んだタクシーが来ていた。賢は孝子の車の助手席で孝子とゆきに、これから起こる報道陣の写真攻勢や質問攻めについて注意をした。

「多分、今帰ると報道陣が押し掛けていて大騒ぎでしょう。いろいろ質問されるでしょうが、「よく分からない。気が付いたら元の場所にいた」とだけ応えたらいいと思います。あまり、余計なことは言わない方がいいでしょう。尾^{おひれ}鰭が付いて大変なことにもなりかねませんから」

「はい、分かりました。そう応える様に心掛けます」

「おかあさんがいなくなったときも大勢の人たちに質問されて大変だったのよ。でもわたしも、「よく分かりません。気が付いたら居なくなっていました」としか言えなかったの。何度聞かれてもそう答えたわ。でもそれが本当のことだったんだもの」

案の定、野岸家の前には報道陣の車が押し掛け、黒山の人だけになっていった。孝子は家の裏手にある駐車場に車を止めようとした。既にそこには何台もの車が停まっていた。それでも何とか角の一角に車を停めた。祐子と亜希子は黒山の人を見て、少し離れたところでタクシーを降りた。先ず賢とゆきが孝子の車から降りた。孝子が降りて車に鍵を掛けると、一斉にカメラのフラッシュが光った。カメラマン達は賢とゆきに向けてもフラッシュを焚いた。大勢の人たちが押し掛けて来た。それぞれカメラやマイク、そのほか金属製の竿の先に取り付けた黒い装置^{かさ}を翳している。一番近くに寄っている男性がハンドマイクを手に

「岩手友愛テレビですが、野岸孝子さんですね。ご帰還の感想をお聞かせください」

と言って孝子にマイクを向けた。孝子は何も応えずに人垣を押し分けて進む賢の後に従った。もう一人のマイクを持った男が大きな声で言った。

「どうして、戻って来られたのですか？」

孝子は、その男の方に顔を向けて

「よく分かりません。気が付いたら戻っていました」

と応えた。男達の中にどよめきが起こった。賢が人を押し分けてなんとか玄関まで辿り着くと、ゆきが進み出て玄関の鍵を開け扉を引いた。三人は押されて雪崩れ込むように玄関から中に入り扉を閉めた。報道陣は少しざわついたが、直ぐに縁側の方に廻った。孝子達は部屋に入ると、居間に入らずいきなり奥の部屋に入った。縁側からガラス戸を通して居間を伺えたが、襖に遮られて孝子達の姿は全く見えない。カメラマンは玄関や縁側から少し離れて様子を伺う形になった。報道陣の一団の周りを隣組の主婦や男達を取り囲んでいた。祐子と亜希子はその囲みの外側で様子を伺っていたが、5分ほどして、報道陣の輪が薄くなり車に戻ったり隣組の人たちに話を聞いたりし始めたのを見計らって、そっと玄関に近寄り中に入ろうとした。その時、一人の女性とカメラを持った男性が近付いて来た。女性が祐子にマイクを向けて言った。

「少し伺います。孝子さんとはどういうご関係ですか？」

祐子と亜希子はそれには応えず、玄関の扉を引いて中に入った。上り框を跨いで床に上がると、奥の部屋からゆきが顔を出して手招きした。二人はゆきが顔を出している入り口から奥の部屋に入った。そこは仏間だった。半間の仏壇が飾ってありその下は戸棚になっていた。仏壇の横には押し入れがありその棧の上に神棚が設けられていた。その部屋にはテーブルは無く、和筆筒が一竿と和式の学習机が一つ置かれているだけだった。筆筒の前に孝子と賢が並んで座っていた。ゆきは孝子の横に腰を下ろした。部屋の隅に重ねてある座布団を2枚取って差し出しながら孝子が言った。

「祐子さん、亜希子さん、どうぞお座りください。大変だったわね。内観さんのおっしゃる通りだわ。でも、いつもテレビで見ている光景の主人公になった気分で楽しかったわ、ふふふ」

孝子はこの雰囲気を楽しんでいるようだ。

「野岸さん、本当の主人公ですよ。今日のテレビのニュースに出ますよ」祐子が言った。皆笑った。

「明日、秋田に出掛けるでしょう、旦那さんに渡すものがあれば用意しておいた方がいいですね。朝早くに家を出ますから。その時、もし報道

陣が来ていたら裏口から出た方がいいですね。まず、亜希子さんがここに来ます。亜希子さんが裏口からそっと入りますから、孝子さんとゆきさんは亜希子さんと入れ替わりに、裏口から出ます。そして、待たせておいたタクシーに乗って駅に行きそこで僕と落ち合う。それと、秋田から帰って来た時、祐子さんと亜希子さんが出迎えてくれます。その後僕たち3人はタクシーでホテルに帰ります。もしその時、報道陣が押し掛けるようでしたら、今日のように知らぬ存ぜんで通しましょう。今日は午後、学校の関係者が見えるはずですから、それが済んだら記者会見に対応して、報道陣に少し情報を渡しましょう。僕が仕切りますよ。そうすれば、明日は比較的行動し易いでしょう」

「内観さん、よろしくお願ひします」

孝子は賢に向かって頭を下げた。ゆきは賢の顔を見つめていたが、頬が熱くなって胸がときめいてくるのを感じた。5人は暫く談笑していたが、インターホンの呼び鈴が鳴ったのでゆきが立って台所に行った。そこにインターホンが設置してあるらしかった。

「おかあさん、学校の先生達が来たわ」

「居間にお通しして。ゆきちゃん、お茶をお願いね」

「僕たちはこの部屋にいます。困ったことができたら呼んでください」

「はい、大丈夫だと思います」

玄関の扉を開けた時、奥の部屋の三人には外の雑踏が聞こえてきた。2人の男性と一人の女性が孝子に促されて居間に入った。小学校の校長、教頭、そして信次の担当教諭だった。校長は痩せて背が高く、眉の薄い神経質そうな男性だった。教頭も同じように背が高い男性だったが、四角い顔をした眉毛の濃い男性だった。女性の教諭は30歳代の卵形の顔をした小柄な女性で、パーマネントを掛け褐色の地に赤いチェックの入ったブラウスを着ていて、玄関で脱いだベージュのコートを折り畳みながら座った。ゆきは三人にお茶を出すとそのまま同席した。儀礼的な挨拶が済むと校長が口を開いた。

「今日、信次君の学級担任の佐野原先生から話を聞いて驚きました。お母さん、ご無事で戻って来られたとのことわたくしどもも安心致しま

した」

「大変ご迷惑をお掛け致しました。子供達のことをお任せしっ放しになってしまって申し訳なく思っております」

「いいえ、そんなことはわたくしたちの義務ですから当然のことです。太郎君も信次君もしっかりしていて、わたくしたちはお母さんの育て方が良かったんだと感心しております」

「信次君はわたくしの学級の生徒ですが、よくわたくしの言うことを聞いてくれます。特にお母さんがおられなくなってしまったせいかな。わたくしに甘えるようにして「先生、先生」と何でもわたしの言う通りにしてくれました」

「先生、本当にありがとうございました」

「ところで、よろしかったら、どうしておられたのか伺えますか？」

「わたくしにもよく分かりません。気が付いたら元の場所に戻ってました」

「その間、記憶が無くなっていたのでしょうか？」

「分かりません。多分そういう状態だったんだと思います」

「いずれにしても、戻って来られて良かったです」

暫く全員黙り込んだ。三人は必死に言葉を探しているようだったが、漸く教頭が口を開いた。

「校長先生、野岸さんはお疲れだと思いますから、そろそろ失礼した方がよろしいのではないのでしょうか？」

「そうですね。それでは失礼しましょう。どうもお邪魔致しました」

「わざわざお越し頂いてありがとうございました。今後も太郎と信次をよろしくお願い致します」

「分かりました。お母さんも健康に気を付けてください。では失礼します」

三人が帰った。孝子とゆきが居間を片付けて奥の部屋に戻って来た。

「先生方はお帰りになりました。心配してくださって、わたしの顔を見にいらっしやっただけだと思います」

「そうですか・・・それでは、これから報道陣に話をしましょう。途中

で太郎君と信次君が帰って来たら、祐子さんと亜希子さんはこの部屋に二人を置いて、ここで遊ばせていてください。会見には出て来ない方がいいと思います。明日のことがありますから、あまり顔を見られない方がいいと思います」

そう言うと賢は孝子とゆきを促して、外から分からないように、わざわざ台所側の出口から部屋を出て玄関側から居間に入った。

「孝子さん、ゆきさん、この縁側に来てください。そこに並んで座って頂けますか？」

ふたりは座布団を3枚敷いて、孝子が真ん中に座り玄関側にゆきが座った。賢は縁側のガラス戸を開けた。報道陣が一斉に縁側の周りに集まって来た。

「報道関係の皆さん、ただいまから野岸孝子さんが失踪してから帰還するまでのことを簡単に説明します。その後で、質問があれば2、3受け付けます。では始めますが、よろしいですか」

賢の言葉にカメラマンはフラッシュを焚き、マイクや集音機を持っているものは構え、記者達はノートとペンを用意して縁側の前に並んだ。賢は声を張り上げて話し始めた。

「報道関係の皆さん、寒い中をご苦労様です。ただいまから、野岸孝子さんの失踪と帰還について説明致します。予めお断りしておきますが、多分皆様の理解を超えた内容があると思いますが、今日は野岸孝子さんや娘さんのゆきさんは大変疲れておりますので、突っ込んだ質問は避けてください。説明は短時間に行います。先ず、わたくしについて説明しておきます。わたくしは先日鹿児島で失踪し帰還を果たした内観賢というものです」

これを聞いて、記者達の中にどよめき起きた。そして、カメラマンが一斉にフラッシュを焚いた。

「今回、野岸孝子さんも必ず帰還できると確信し、野岸さんの帰還を支援する為にこちらに来ました。皆さんもご存じの通り、野岸さんが失踪したのは1年3ヶ月前です。皆さんには信じられないかも知れませんが野岸さんはこの裏の駐車場に停めてあった軽自動車の中に居て、その自

自動車と共にこの場から消えました。車で移動したり、レッカー車で運ばれて行ったりしたわけではありません。手品のイリュージョンのように消えました。それからはご存じのように、何の手懸かりもなく1年3ヶ月が過ぎました。わたくしは自分の経験から、長女のゆきさんと二人の息子さん達の意識の力が野岸さんを帰還させるための鍵だと知りました。それで、昨日意識の集中を実施してその成果を得ました。野岸さんが車と共に戻りました。わたくしたちは、車が戻って来るところを直接確認しておりませんのでどんな風に戻ったかは分かりませんが、この部屋で三人が意識を集中させているときに玄関が開いて野岸さんが入って来ました。本人は失踪した時点のつもりで戻って来ていました。わたくしが説明したので、そこで初めて1年3ヶ月が経過していることを理解しました。わたくしたちは翌日警察に報告することに決めました。それは、野岸さんの存在の固定化が必要と考えたからです。これらのことは既に今朝、警察に報告を済ませております。以上が野岸孝子さんの失踪と帰還についての説明です。何か質問があればお受けします。ただ、野岸さん達がお疲れであることを考慮してお願いします」

一人が手を挙げた。賢が促すと孝子に向かって質問した。

「日光新聞の小波です。野岸孝子さんに伺います。失踪された時はどちらにいらしたのですか？また、その時はどういう感覚だったのでしょうか？」

孝子が応えた。

「わたくしは失踪してからのことは何も分かりません。思考も感覚も無かったと思います。どこにいたのかも分かりません」

「わたくしが少し補足します。帰還した自動車の時計は失踪した時の時刻を差していました。帰還後その時計は動いていて、現在およそ1時間ずれています」

また別の男性が手を挙げ、賢が促した。

「津軽BTVテレビの金村と申します。野岸ゆきさんにお伺いします。野岸孝子さんが失踪している間、何らかの連絡とか、通信のようなことはありませんでしたか？」

ゆきが応えた。

「一切ありません。母が失踪してから、警察の調査が終了した後、母の失踪の件でこの家を訪ねてくださったのは、ここにいらっしゃる内観さんとそのお友達だけです。母からの連絡は全くありませんでした」

また、一人の男性が手を挙げた。

「開報新聞です。野岸孝子さんに伺います。失踪された時、誰かが来て麻酔薬を嗅がされたり、殴られて気を失ったということはありませんか？」

「ありません。戻った時も失踪した時のままでした」

今度は一人の女性が手を挙げた。

「野岸孝子さんに伺います。わたしは岩手地域情報新聞の粕沼です。大変失礼な質問になるかも知れませんが、お許し頂きたいと思えます。野岸孝子さんのご主人は現在、秋田刑務所に服役中とお聞きしておりますがこのことは既にご存じなのでしょうか？」

「失踪する前は月に1度接見に行っておりましたから、何かあったと思っていますが、多分このことは知らないと思います」

「お会いするのはいつ頃になりますか？」

賢が間に入った。

「そのような、個人的な質問は避けて頂けますか？おふたりとも疲れていますので、失踪に関する質問だけに止めてください」

「失礼致しました」

後方にいた男性が手を上げた。賢はそれが鹿島康介だと分かった。

「花巻に住む鹿島康介です。ぼくは個人的に失踪事件を調査しています。野岸孝子さんに質問します。失踪するとき、車のエンジンは掛かっていましたか？そして、帰還したときはどうでしたか？」

「はい、わたしがエンジンを掛けて出掛けようとした時意識が無くなりましたから、失踪する時エンジンは掛かっていたと思います。そして、戻って来た時は・・・ええと、車の中に戻って・・・ええと、その時、まだぼおっとしていて意識が定まっていませんでしたが・・・確か、エンジンが・・・はい、掛かっていました。そう、確かに掛かって

いました。それで、キーを回して抜きました。そう、その時、ヘッドライトも点いていて、警告音が鳴ったのでヘッドライトのスイッチを切りました。そう、確かにそうです」

報道陣の中からどよめきが起きた。三人ほどが手を挙げた。賢がその内の一人を差した。

「もう一度、その話をして頂けませんか？戻って来た時にエンジンが掛かっていたというのは、どこから帰って来たからではないのですか？」

「いいえ、何処にも行っていませんし、どこから戻って来た訳でもありません」

「ガソリンはどうでしたか？もっとも、途中で給油もできますが」

「元のままでした」

賢が割って入った。

「わたしが初めに申しあげましたように、この出来事はこれまでの常識の領域を逸脱しておりますから、これ以上の質問はご容赦頂きたいと思えます。それでは、これで公開の会見を終わらせて頂きます」

一人の男性が手を挙げながら言った。

「あの一、野岸孝子さん、今どんなお気持ちですか？」

野岸孝子がにっこり笑って答えた。

「今、わたしはとても幸せです。子供達がわたしを呼び戻してくれたのです。わたしが戻った時、ここにいるゆきはわたしの胸の中で10分以上泣き続けました。夜はこの子と二人の息子が、わたしが消えてしまわないように、一晩中手を握ってしてくれました。わたしはこれほど自分と子供達の結び付きを強く感じたことはありません。全てが有り難く、この上なく幸せです。それに、ここにおられる内観さんと内観さんのご友人の崎野祐子さん、藤代亜希子さんには何とお礼を申し上げていいかわかりません。わたくしたち家族の一生の恩人です」

賢は自分達のことを話が及んだのですこし照れたが、そこで会見を打ち切った。

「それでは、これで会見を終わります。この後は暫く野岸さんご家族に

静かにお話し頂きたいので、申し訳ありませんが、皆様にはお引き取り頂きたいです。よろしくお願い致します」

誰か分からなかったが2人が拍手をした。賢は孝子とゆきを促して居間に戻し、自分がガラス戸を閉めた。報道陣は賢の一言で、それぞれ機材を車に積み込み始めた。三人が台所経由で奥の部屋に戻ると、太郎と信次が二人の女性と一緒に仏壇の戸棚からボールを出して遊んでいた。

「賢さん、申し訳ありませんでした。わたくし、どうしても分かりませんとだけ応えることができなくて……」

孝子が済まなように賢に詫びた。

「あれでいいんです。とてもうまく応えられましたよ。あなたもゆきさんも。これから多分、いろいろ邪推したり中傷したりする人たちも現れるでしょうが気にしないで「分かりません」で通してくださいね。太郎君、信次君、偉かったじゃないか、静かにしていい」

「祐子お姉さんと亜希子お姉さんが、静かにしていなさいって言ったもの。それに、俺っち遊んでくれたから面白かった」

「おれも、おもしろかった」

三人は野岸家を後にした。ゆきが今日はすき焼きの材料を買って来たから食べて行けと言ったが、三人は遠慮した。家族水入らずで夕食を楽しんで欲しかったし、祐子と亜希子はホテルの夕食にも興味があったのである。三人は5時15分にホテルに着いた。エントランスを入る時には雪がぱらつき始めていて、風が吹くと、賢は体の底から震えが起きて来てそれが全身に広がるのを感じた。三人共身体が冷え切っていた。祐子と亜希子はコートに包まって身体を縮めてエントランスに入った。三人は先ず入浴することにした。賢は部屋に入るとすぐ浴衣に着替え、タオルを持って大浴場に出掛けた。エレベータに乗ると、4階で祐子と亜希子が乗って来た。二人とも浴衣に着替えていた。祐子のほち切れる美しさはもちろんのこと、普段あまり目立たない亜希子も首筋から肩に掛けて清楚な色気を感じさせた。三人は揃って3階で降り大浴場に向かった。

「ここは、遠赤外線の出る^{かくせんせき}角閃石を使ったお風呂なのよ。身体が温ま

るわ」

祐子の言葉で、亜希子は風呂への期待が高まった。賢は昨日この風呂に入った時、身体がとても温まったのを思い出して「なるほど」と思った。三人は大浴場の前で待ち合わせることにした。賢はいつものように湯船の中で瞑想と省察を行った。孝子とゆきの心の動きが、いつも自分の意識の鏡に映っていた。孝子の意識は夕方になって漸く、時間的な跳躍の結果を受け入れることができたようだった。ゆきは母が戻ったことと、賢達が側にいるという二つの喜びの中に浸^{ひた}っていた。太郎や信次の喜びは、昨夜の衝撃的な歓喜から一転、安定していつもの元気に戻っていたが、その一方でこれまで自分達に科して来た責任感という添え木を取り払い、母に抱かれた安心感にどっぷり浸かっていた。それが祐子や亜希子への自然な甘えになっていた。祐子と亜希子は役割を演じ切っていた。全てが順調に推移した。ふたりは同調しているかの様な行動をした。それは大浴場に入っても続いていた。祐子は亜希子の身体を見て清楚だと思い、亜希子は祐子の身体を見て美しいと思った。ふたりは湯船の中で、野岸家の人たちの話をした。亜希子は自分が帰還した時のことを思い出しながら話した。祐子は自分が賢を呼び戻した時のことを思い興し、孝子の帰還と対比させていた。

「お姉様、わたくし達はこんなことで賢さんのお役に立っているのでしょうか？」

「大丈夫よ、賢さんはわたくしたちの考えの及ばないところで生きているのよ。あの人の魂の奥には愛情があるのよ。誰もあの人には抗えないわ。ここでは、わたしたちはあの人の手足になり切ることが大切よ」
「わたくしはあの方に命を捧げています。あの方の一部にでもなれたら、それだけで生きた甲斐があります」

「わたしが言うのはね、今は自分を空しくしてあの人に自分を預けようということよ。だから、役に立とうとかは考えない方がいいと思うのよ」
「そうですね、わたくしが愚かでした、お姉様。精一杯役割を演じますわ」

「亜希子さん、わたしたちは同じ一人の男性と生きなければならないの

よ。あなた、そんなことできる？わたしはもし目の前であなたと賢さんが抱き合っていたら、悲しくて死んでしまうわ」

「わたくしもそうです。あの方と一緒にいるときは天国にいるような気分ですが、お姉様が賢さんと二人きりでいらっしゃると思うと、もうじっとしてられなくなります。これから、どうしたらいいのでしょうか？お姉様、教えてください」

「お父様が言っていたわね。これからの世界は、この社会にある現在の常識や規範、教義などの既成概念を全てかなぐり捨てて、意識の求めるままに生きる必要が出てくるって。わたし達をその先行事例にしようとしているのよ。迷いもあるようだけど」

「問題は、わたくし達の中に湧き起こる嫉妬心ですわね。わたくしの意識は賢さんと共にいるだけで幸せという感覚しかないのに、心が、祐子お姉様が賢さんをわたしから取り上げてしまうとか、わたくしのことをもっと愛して欲しいとか思って、そこから意識の中に祐子お姉様に対して反発を起こさせようとするのですね」

「きっとそうだと思うわ。亜希子さん、わたしも同じよ。でも、これからどうしたらいいかしら。あなた、賢さんに抱かれたことはあるの？」

「・・・・お姉様は？」

「・・・・その話は止めましょう」

「でも、いずれそのことで苦しくなってきましたわ。このことははっきりと決めておいた方がいいと思いますわ」

「それは動物的な面の話よ。人には動物には無い意識や思考をする能力があるわ。でも賢さんはいつも、「ほとんどの人は本当の人間としては生きていない」って言っているわ。本当の人間になるのも難しいんだって。その上、その意識や思考を超える世界があるらしいの。それが純粋な愛の世界なんだって。だから、もしあなたが賢さんと肉体的な関係を持って、本当はどうってことはないはずなのよ。それが愛にまで高まっているかどうかの問題なのよ」

「でも、お姉様が賢さんとふたりきりでいる時、わたくしはどうしても賢さんから切り離された感覚を持つてしまうの。その時、思考なんて働

いていないわ。ですから、わたくしとお姉様は自然な形で賢さんに接して、もしお姉様とわたくしのどちらかが賢さんと愛の意識が同調した時には、同調した方がその愛の意識を持って賢さんに接し、そうでない場合は一歩引き下がる様にしたらいいと思うわ」

「もし、ふたりが同時にそういう状態になったらどうするの？」

「さっきの賢さんの考えからすると、その時はお互いに意志の赴くままに行動するの。競い合うのでしたらそのまま思い切り競い合う。自分がそのレベルにあるということを認識できていいのではないかしら。3人で一緒にいることができれば、そういうレベルにいることになるのだと思うわ」

「確かにそうね。ただ、お互いに憎み合うのは止めましょうね。お互いを尊重し合った上で共に生きましょう」

「はい、お姉様。わたくしも、これからは積極的に賢さんに接します。わたくしの一生の伴侶ですもの」

「わたしの伴侶でもあるわ。わたしは賢さんの子供を産むわよ」

「……わたしは、賢さんの一部になりますわ」

それから、ふたりは黙り込んでしまった。湯船から上がって身体を洗い、髪を洗って再び湯船に浸かった。その行動は全く同期しているようだった。ふたりが女場から出て来ると既に賢が待っていた。

「ゆっくりできたか？」

「あなた、待った？」

祐子がいきなり、賢に近づいて賢の左手に自分の右手を絡ませた。亜希子も直ぐに賢に近づいて、賢の右手を握って言った。

「賢さん、今日はお食事の後お部屋に伺ってもよろしいでしょうか？」

「うっ、うん、いいよ」

「わたしも行くわ」

「これからのことを打ち合わせよう」

ふたりとも合意した。3人は一旦部屋に戻りタオルを置いてから、夕食を摂る為にレストランに向かった。祐子が楽しみにしていたこの土地の食材が味わえる夕食だった。豪華さはなかったが、煮物や和え物は胡麻

と味噌の独特の風味を感じさせた。祐子は喜びを隠さずに食べた。亜希子もはしゃぐように食事を楽しんだ。食事が済んで部屋に戻ると、賢は失踪事件調査ノートに野岸孝子の意識の変化を記載した。重要な事項として、公開会見で鹿島康介が質問した「自動車のエンジンが掛かった状態で失踪し、エンジンが掛かった状態で帰還した」という信じられないような事項について、自分の判断を介入させず客観的な記録のみを記入した。また、タイヤの轍についての記述も追記した。賢がノートを閉じてセカンドバッグに戻すとドアをロックする音がした。ドアノブを引くと祐子が入って来ていきなり抱きついた。浴衣を通して祐子の身体の感触を肌を感じると賢は自分が興奮してくるのが分かった。祐子はそんなことはお構いなく賢に身体を預けた。賢は少し祐子を抱きしめてから引き離して言った。

「亜希子さんが来るぞ。祐子、今はまずいよ」

「分かっているわ、だから離れたくないの」

その時、ドアをロックする音がした。賢は亜希子だと思った。賢は祐子を無理に引き離して自分の興奮が分からないようにしてからドアを開けた。亜希子が入って来た。祐子は襟を直しながら言った。

「亜希子さん、早いわね」

「お姉様も、もういらしていたんですね。わたくし、急いで参りましたのに」

賢は幸い、亜希子が気付かなかったと思った。しかし、その考えが甘いことが直ぐに分かった。亜希子が下を向いて言った。

「わたくしも・・・抱きしめてください」

祐子は知らんぷりをして、窓際まで行くと、椅子に腰掛けて外を見ていた。躊躇している賢の前に佇んで亜希子が涙ぐんだ。賢は亜希子の肩を抱いた。亜希子は賢の胸に顔を埋めた。賢はそっと亜希子を抱き締めてから静かに引きは離した。亜希子の身体からはほのかな石けんの香りがした。抱き締めた時亜希子のしっとりした髪が賢の指に絡み着いた。賢は強く抱きしめたい衝動に駆られたが、その感情は容易に抑えることができた。祐子が振り向いて言った。

「このホテルは、語り部が遠野の民話を実演してくれるらしいのよ。もう始まっているけど、一緒に聞きに行かない？」

三人は3階の語り部のホールに出掛けた。祐子の言うとおりは既に始まっていた。語り部は50歳前後の女性で、地元の方言を使って話している。どうやら「座敷わらし」の話をしているようだ。賢が後方に席を取ると、その右に亜希子、左に祐子が賢に身を寄せるようにして座った。賢は何とか話の内容を聞き取ろうとしていて、ふと今朝二人の主婦の後から野岸家の台所に駆け足で入って行った女の子を思い浮かべた。語り部は、続いて「カッパの話」をし、それで予定の民話は終わりだった。その後で、泊まり客のリクエストに応じて「おしらさまの話」をした。祐子が小さい声で

「わたしもリクエストしようかな・・・でもやめよう」

と独り言の様に言った。三人は語り部ホールを出ると、賢の部屋に戻った。賢がテレビを点けてチャンネルを選択してゆくと、ニュース特番で野岸孝子の帰還を取り上げていた。賢はこの番組が全国放送されているのだと思った。もしかすると亜希子の両親も観ているかも知れない。放送は始まったばかりだった。孝子が中心になり、賢とゆきが左右に並んで座っている。自分が話している場面になった。孝子は下を向いて賢の説明を聞いている。ゆきは賢が話をするときは賢の顔を覗く様に見つめていた。公開会見の放映が終わった後キャスターの説明があった。

「この事件は1年3ヶ月前に起こりました。当時警察は勿論のこと、隣組の人たちも総出で捜索を行いました、何の手懸かりも掴めませんでした。それが、昨夜突然野岸孝子さんが自宅に戻って来たのです。先ほどの会見での話にもありましたように、野岸孝子さんは失踪している間の記憶が全く無いと言っています。会見で司会をしていた内観賢さんの話では、突然車と共に現れたということですが、何とも奇怪としか言いようがありません。しかし、内観賢さんも鹿児島で失踪した経験があります。その時は鹿児島湾を走るフェリーの上で失踪し、1ヶ月後にホテルの部屋に出現したのです。内観賢さんの場合を考えると、野岸孝子さんのケースも同様な現象と考えることができるかも知れません。た

だ、野岸孝子さんが失踪した時も、帰還した時も車に乗っていて車のエンジンは掛かっていたと言っている訳ですから、車で何所か遠方に行っていて、昨日の夜戻って来たという可能性もあります。普通に考えると、むしろ我々にはその線が一番自然に受け入れられます。しかし、野岸孝子さんが失踪し戻って来たという事実だけがはっきりしているだけで、今のところ刑事的な事件とは何等関係していませんので、この事件は神隠しからの帰還という形で幕を閉じることになると思われます・・・」

祐子が言った。

「あなた、初めから車でどこかに行っていて車で戻って来たことにしてしまえばよかったわね。そうすれば皆納得して終わるのに」

「それは駄目だ。核心部分に嘘を入れると後戻りできなくなるからだ」
亜希子が言った。

「わたくしは、賢さんのそういうところを最も尊敬しています」

祐子は少しうろたえて言った。

「わたしも嘘を言うつもりじゃないわよ。周りの人たちの野岸孝子さんへの関心が直ぐに消えるようにするには、それが一番いいと思ったのよ」

「祐子の気持ちはよく分かるよ。亜希子さんの言葉もありがたいと思う。でも、この失踪事件は解決しなくてはならないんだ。だから、自分達の論理の中にも、人への説明の中にも、真実と異なる内容を含めてはいけない」

祐子が頷くと、亜希子が言った。

「わたくしのこと、亜希子と呼び捨てにしてください。祐子お姉様には「祐子」と呼び捨てていらっしゃるのに、わたくしには「亜希子さん」っておっしゃるので、何となく距離を置かれているような気が致します。わたくしにも祐子お姉様と同じように接してください」

「分かった、これからはそうするよ」

祐子は、普段とは異なり亜希子が積極的に出てきているのを感じて気がなかった。

「明日だけど、俺と孝子さん、それにゆきさんは夕方までに戻るために朝早く発つから、祐子と亜希子も一緒に起きてくれるか？」

亜希子は初めて自分のことを亜希子と呼んでくれて嬉しかった。声を弾ませて言った。

「ホテルを何時に出ればいいかしら」

「7時50分の盛岡行きに乗るから、7時半にはゆきさんの家を出たい。そうすると、7時25分頃に家に着きたいな。だから7時10分にここを出ればいいね。食事は6時15分から摂ろう。ということは6時に起きればいいな。君たちは太郎君と信次君の面倒をみてくれよ。子供達の食事は孝子さんが支度をしていると思うけど、学校に出掛ける時から我々に戻るまでの間ふたりで留守番をして欲しいんだ。あそこの家から買い物に行くには少し距離があるし、それに誰かに見られるとまずいから気を付けて欲しいんだ。特に亜希子は顔を出さない方がいい。もし、朝からカメラマンなんかが来ていたら、俺たちは裏口から出るからな」三人がタクシーで野岸家に着いたのは7時20分過ぎだった。外には誰もいなかった。賢はタクシーの運転手に少し待つように言って玄関に入った。祐子と亜希子も続いた。既に玄関には孝子とゆきが出て待っていた。

「報道関係の人は誰も来ていないようだから、今の内に僕と一緒に玄関から出てください。祐子と亜希子が留守番をしますので直ぐ出掛けましょう」

賢と孝子、ゆきの3人は直ぐにタクシーに乗った。孝子は濃い紫色のベルベットのコートで身を包み、風呂敷包みを手にしている。ゆきは臙脂えんじのコートとブラウン地に模様の入ったハンドバッグという出で立ちだ。賢はジャケットを身に付けているだけで、見るからに寒々しかった。タクシーが出掛けるのを見送って、祐子と亜希子は家の中に入った。孝子が賢を気づかって言った。

「お寒くありませんか？薄着のようですが」

「大丈夫です。下にセーターを着ていますから」

助手席から、運転席の後ろに乗っている孝子の方に振り返って賢が応え

た。

電車の中は快適だった。ゆきは孝子と賢の間に座った。電車が揺れて自分の肩が賢の肩にぶつかると、その度にゆきは身体が熱くなるのを覚えた。賢が孝子と話す時に、ゆきの方に顔を向けると決まってゆきは赤面した。

「接見の時間はおよそ15分程度ですね。孝子さんは何度も接見されていたからおわかりでしょうが、15分なんてあっという間ですから、話すことを予め決めておかないとね」

「ええ、わたしも初めは顔を見合わせているだけで、直ぐに15分経ってしまいました。時間も掛かるしお金も大変ですから、そう何度も秋田には行けません。時間の短いのをどれほど悔しく思ったか知れません。ですから、夏は1泊してまた翌日にも接見したりしました」

「そうだったの。わたし、お母さんが時々仕事で1泊の出張に出掛けているのを急に思っていたのよ。最初は、毎月お店の締め報告に出掛けると言うので何とも感じなかったけど、いつも出掛けるとき、お母さんがそわそわしていて落ち着かなかったの、きっとお父さんに会いに行くんじゃないかって思っていたの」

「ごめんね。ゆきには打ち明けたかったんだけど、余計な心配をさせると思って黙っていたのよ。ゆきはお父さんに会うのは5年振りだったでしょう。大丈夫だった？」

「わたし、泣き出しちゃった。でも大丈夫だったわよ。賢さんと一緒だったからとても心強かったわ。それに、お父さん元気そうで安心したもの。お父さんの無実を信じているわ。今は、会って良かったと思っているわ」

「そうだゆきさん、僕の部屋にハンカチ、忘れていっただろう。持って来たよ」

そう言いながら、賢はセカンドバッグからゆきのハンカチを取り出した。

「賢さん、そのそのハンカチ、持っていて頂きたいの。わたしたちのこと忘れないように」

「まあ、ゆきったら」

ゆきの顔が真っ赤になった。

「分かった。それじゃあ、このハンカチはゆきさんと思って預かっておくよ。ハンカチは無くても、ぼくは君たちのことは絶対忘れたりしないけどね」

ゆきは、「分かってないわね。それはわたしの思いよ」と心で話した。三人が刑務所に着いたのは前回とほぼ同じ時刻だった。刑務所の看守は、賢とゆきのこと、そして野岸孝子のことよく覚えていて、手続きは比較的簡単に済ませることができた。とは言え、やはり12、3分は待つことになった。接見所に入ると既に野岸和也は接見用窓の向こう側の椅子に座っていた。三人が入ってゆくと、和也は立ち上がりそうになったが、看守がそれを制した。漸く椅子に掛け直して和也は言った。

「孝子、戻って来られたのか？」

孝子は涙を流しながら言った。

「ええあなた、子供達がわたしを呼び戻してくれたの。それに内観さんがわたくしたちを救ってくださったの。あなたからもお礼を申し上げます」

「お父さん、やったわよ」

「内観さん、本当にありがとうございました。あなたの様な親切な方には生まれてこの方巡り逢ったことはありません。何とお礼を申し上げていいか言葉ありません。それにゆき、よく頑張ってくれたね」

「お父さん、あと2年でしょう。わたし待つわ。たとえ無実の罪が晴れなくても頑張る。ねえ、おかあさん」

「そうよあなた、あなたも頑張ってるね。手袋とマフラーと毛糸の帽子を差し入れておいたわ、多分大丈夫だと思うけど、もし渡してもらえなかったら我慢してね」

「おれのこと大丈夫だよ。それよりお前達、身体を壊さないようにしろよ。ゆき、お母さんのことを頼むぞ」

「分かったわ。おとうさん、太郎や信次に何か伝えることはない？」

「ふたりとも、大きくなっただろうな。去年お母さんが写真を見せてく

れたけど、今はもっと大きくなっているんだろうな。「お父さんは遠くでお勤めをしているから今は戻れないけど、必ず戻って来るから楽しく生活しなさい」って伝えてくれ」

「ふたりとも元気よ、大丈夫。今の言葉、伝えるわ。今度来る時写真を持って来るわね。でも看守が写真は認めてないから、差し入れられないのよ。ここで見せるしかないわね」

ゆきが、どうして孝子が戻れたかを説明した。和也は不思議そうな顔をして聞いていた。賢は和也の顔が受刑者の顔でなくなってきたのに気付いた。そこには明るさが表れ、希望の色さえ見えた。看守が接見時間終了の連絡に来るまで三人は話し込んだ。

「内観さんほんとうにありがとうございました。孝子、ゆき、ありがとう。又来てくれよな。それから、太郎と信次にはさっきの伝言を頼むよ。うまく話してくれ」

孝子とゆきの目に涙は無かった。

三人が遠野駅の改札を出ると、祐子が迎えに来ていた。祐子は賢の姿を見てにっこりした。

「お帰りなさい！孝子さん、ご主人お元気でしたか？」

「はい、とつても元気そうで安心しました」

4人は1台のタクシーに乗り込んだ。家に着くと、カメラマンのフラッシュを一斉に浴びた。記者がマイクを差し出して孝子に訪ねた。

「どちらに行かれたのですか？」

「誰かに、会いに行ったのですか？」

4人ともそれを無視した。家に入るとゆきが玄関の引き戸を閉め内側から鍵を掛けた。

孝子に促されて賢と祐子が居間に上がると、そこには亜希子と太郎、信次が大人しく座っていた。この数日、太郎と信次はコアラの様に大人しくしている。賢はふたりの腕白さを考えると少し可哀想になった。ふたりとも母親が戻って来て嬉しくて堪らないはずだが、報道陣が押し掛けテレビでも放映されて、周囲に尋常でないことが起きていることを子供ながらに理解しているのだと思った。既に縁側の雨戸が閉めてあり、外

からは誰も覗くことができない。間もなくカメラマン達も引き上げるだろうと思った。亜希子が言った。

「ふたりとも、お勉強をしたりご本を読んだりして、とってお利口だったんですよ。褒めてあげて頂けますか？」

孝子が太郎と信次のところに行って、ふたりの頭を撫でながら言った。

「太郎も、信次もお利口だったね。ご褒美に今度のお休みに、動物園に連れてってあげるよ。楽しみにしてなさい」

「わーい、やったー」

「やったー」

子供達の喜びようは、半分甘えを含んでいる感があった。賢達は嬉しかった。三人はゆきの入れてくれた茶で喉を潤してから暇乞いをした。孝子とゆきは何度も礼を言った。太郎と信次は三人と分かれることに寂しさを感じているようだったが、母が戻って来た喜びの感情が別れの感傷を癒しても余りあった。

「賢お兄さん、お姉さん達、いろいろありがとう。また来てね」

「ありがとう、また来てね」

三人は「機会があったらまた来る」と言って分かれた。既に7時を回っていた。祐子と亜希子は一日中、孝子の家に幽閉されていたような気分だったので、家を出ると途端に解放感で満たされた。ホテルに着くと三人は直ぐに食事を摂ることにした。この日は三陸海岸で陸揚げされた海の幸という名目で、刺身と魚の煮込み料理がメインだった。祐子と亜希子は十分に食事を堪能した。賢は幾分疲れを感じていたが、ふたりの明るい声に鼓舞されたかのように元気を取り戻した。食事を済ますと、賢は自分の部屋に戻りベッドの上に身を投げた。「これでこの失踪事件もけりが付いた」と思った。「明日は孝子の言った弁護士に会って、野岸和也のことを聴こう、それから鹿島康介と会って、この世界における3次元的事象と今度の失踪事件について話し合おう」と考えた。ある程度方向性が見えたら、次の失踪問題に取り組んでみたいと思った。そんなことを考えている内に賢は眠りに落ちていた。ホテルの部屋に備え付けられている電話のベルの音にはっとして目を覚ました。祐子からだっ

た。これから来るという電話だった。祐子が電話を切ると、賢はまた眠気に襲われた。しかし、ドアをノックする音で再び目を覚ました。祐子は部屋に入ると言った。

「あなた、2回も来たのよ。どうしたの？」

「眠っちゃったようだ。ごめん。さっき、亜希子さんに外で会ったわ。亜希子さんもここに来たみたいね」

「今日は一寸疲れちゃったみたいだ」

「疲れが溜まったのよ。お風呂に行くといいわ。一緒に行こうよ。後で、わたしがマッサージしてあげる」

祐子は賢の部屋を出て、急いで自分の部屋にタオルを取りに戻った。賢も浴衣に着替え、タオルを手にして部屋を出た。まだ眠気が取れていない。時々目を擦りながらエレベータを3階で降りて浴室に向かって歩いていると、祐子が小走りに追い駆けて来た。

「元気出して！お風呂から出たらここで待っていてね」

賢は流し湯で身体を流し、頭から水を被ってから湯船に浸かった。気分がすっきりして来た。賢はいつものように省察を行った。帰りの電車の中の孝子とゆきはとても穏やかな表情をしていた。刑務所を出る時、ふたりは安らぎの感覚を覚えているようだった。野岸和也はその姿を見て喜びに溢れた表情をしていた。今までの苦痛の影が消え、希望の色が浮かんでいた。この孝子の失踪は和也にとってもこの上ない学びとなった。勿論和也の嵌り込んだ泥沼は孝子やゆき達の人生に大きな試練を与えもした。この泥沼で更に孝子の失踪という八方塞がりの状況に陥り、彼女たちが自分たちの行った選択を通して、一つの大きな学びを得るところを見た。ずっと以前からあった深い愛の心だ。彼女たちはその心に触れたのだと分かった。和也の過ごした獄中の5年間は自分の心の動きを反映したものだった。心は右に揺れ、左に揺れて毎日就寝の時間になると、振り払っても振り払っても現れる自省と葛藤の思いに熟睡できない日々が続いていた。和也は賢にそう言っていた。今朝のゆきと孝子の心は不安と期待に揺れ動いていたが、遠野に戻った時のふたりの心は秋の青空の如く澄みきっていた。

賢が浴室の暖簾を潜って廊下に出ると、祐子と亜希子が待っていた。

「亜希子も来ていたのか？」

「ええ、わたくしの方が先に入っていました。先ほどお部屋に伺ったのですが、いらっしゃらないようでした」

「ごめん、ごろっと横になったらそのまま寝込んでしまった。気付かなかった」

「わたくし、あとでお伺いします。肩を揉んで差し上げます」

「あら、亜希子さん、わたしがマッサージしてあげることになっているのよ」

「おれは、今日はこのまま休みたいから、祐子も亜希子もゆっくり休めよ」

ふたりは少々不満そうだったが、エレベータを4階で降りるときに「おやすみなさい」と言って降りた。賢は部屋に戻ると眠気は醒めていた。さっきは身体の冷えから来る疲労だったのだと思った。賢はセカンドバッグを開けると「おもいで」のノートを取り出した。11時を回っていた。この詩をイメージしてみようと思った。そこには早瀬由美の心の動きが書かれているはずだ。その心の動きが早瀬由美の失踪の原因に繋がるかどうかは分からないが、賢は由美が意図的に失踪したという思いを強くした。そうだとするとそこには失踪のメカニズムを解明するヒントが潜んでいるように思えた。

ああ

冬の雨のひとしづくにも似た、

街の冷たい水のしたたりが、

私の魂を凍らせてゆく

空は青、大地は緑に、血の色は赤、

水は透き通って、

それでも、私の中を巡る

彷徨える心は、

私から離れ

あなたを求め

こなた、かなたを追いかける
いまあなたに巡り逢い
心は戻り
私の内なる太陽は
麗しき亜子を産み落とす
あなたは幣を手に
静かな鏡面に祈る
水面にひと滴の涙が落ち
波は無限に広がり
辺り一面
花が咲き乱れ、
ふたたび時はながれはじめる
ああ

早瀬由美の心は何かを求めて逡巡していたのだ。そして、その目的のものに出逢う。まだ実際には出逢っていないのかも知れないが、出逢うことで新しい生を生きると言っている。人が思考の中に逡巡している時は本当の生を生きているとは言えない。その何かとは絶対存在のことなのではないか。その絶対存在に遭遇できるとそこから新しい生が始まる。その生では全てが美しく息づいている。新しい生は絶対存在に守られている本来の生に違いない。その段階に到達することを早瀬由美は望んでいたのではないだろうか。その時、ドアをノックする音がした。賢がドアを開けると亜希子が立っていた。亜希子は浴衣姿で黙って立っている。賢は亜希子の肩に手を掛けて部屋の中に導き入れドアに鍵を掛けた。ベッドの上にはノートが開いたままになっていた。賢は亜希子とゆっくり話したいと思った。壁際のテーブルの上にコーヒーのセットが用意されていたので、2つのカップにポットのコーヒーを注ぎ砂糖とスプーンを添えてから亜希子の腰掛けているベッドの方を振り返った。亜希子がノートを手にして読んでいた。

「この詩はわたくしの心と同じことを詠^{うた}っているわ。この詩のあなたは賢さんのことよ。わたくしは賢さんを通して世界を観ていますもの」

賢はノートを見られてしまったことを少し悔やんだが、見られてしまった以上、早瀬由美の言った言葉に縛られてきたこれまでの自分を改めるしかなかった。

「おれはそこに出てくるあなたって絶対存在のように思うけどな。例えば宇宙創生の神の様な存在みたいな」

「はい賢さん、わたくしはあなたがその存在に見えるのです。別に誇張しているのではないのです。わたくしにとってあなたは全てなのです」

「亜希子、そんなことを言っではいけない。おれは唯の人間で、たまたま君が危機に瀕しているときに通り掛かったに過ぎないんだ。しかし、君は今では僕の友達から永遠の恋人に変わった。だから、おれは一人の人間として君を愛する。君にもそうして欲しい」

「わたくしはあなたが近くにいらっしゃるだけで、自分が活性化してくるのを感じます。あなたに生かされているような感じなのです。でも、あなたがそうおっしゃるのならそうします。人としてのあなたを愛してゆきます」

亜希子はノートを閉じると立ち上がった。賢は亜希子を窓際の椅子に座るように手招きした。

「今日のご苦労様、一日中家の中に居るのは大変だったろう？」

賢はそう言いながらコーヒーを亜希子の前に押し出して、亜希子の意識をノートの詩から逸らせた。

「いいえ、太郎君、信次君と楽しく過ごせたので有意義でした。あの二人に変なボールも見せて頂いたりして・・・賢さんの方がずっと大変でしたでしょう？お疲れのようですから、わたくしに少し肩をマッサージさせてください」

「ありがとう、だけど風呂に入ったら大分すっきりしたよ、君だって疲れているんだから」

「いいえ、わたくしは疲れていません。ですから少しだけマッサージさせてください」

そう言うと亜希子は立ち上がり賢の腰掛けている椅子の後ろ側に廻り、賢の肩に両手をかけた。賢の固い筋肉の感触が掌から伝わってきた。亜

希子は賢の肩を逞しく感じ、胸の鼓動が激しくなって来るのが分かったが、気持ちを落ち着けるように自分に言い聞かせながらそっと揉み始めた。柔らかい亜希子の手感触が賢には心地よかった。賢の肩から首にかけての筋肉は驚くほど固かった。賢は暫く下を向いて気持ちよさそうにしていたが、亜希子も疲れているはずだと思った。

「ありがとう、うんと楽になったよ」

そう言いながら立ち上がると椅子を横に避けて亜希子を抱きしめた。亜希子は身体から力が抜けてゆくのを感じた。賢は右手で亜希子の頭を支え口吻くちづけをした。亜希子は膝ががくつとして、賢に身を委ねた。亜希子が自分の部屋に戻ったのは、1時過ぎだった。賢は亜希子が帰ると、直ぐにまた眠気が襲ってきてそのままベッドに潜り込んだ。亜希子は目が冴えていつまでも眠りに落ちることができなかった。賢の身体は逞しかった。賢の肩に触れたとき脈動している自分の心臓の鼓動が感じられ胸が躍った。自分の眼前にいる賢の肌に触れるのは恥ずかしかったが、暫くして亜希子はいつの間にか賢の背中を揉んでいる自分の姿を遠くから見つめている自分に気付いた。妙な感覚だった。賢の背中中は広く、その背中に触れている自分がまるで父親にじゃれついている幼児のようで愛おしかった。亜希子の頭の中を朝まで同じ情景が駆け巡った。時々うとうとしたが、意識ははっきりしていた。7時になると亜希子は眠い目を無理矢理広げて顔を洗った。まだ、身体全体に賢の筋肉の感触が残っている。身支度を調べると、朝食を摂る為に、レストランに行った。既に祐子が着席していた。亜希子が声を掛けた。

「おはようございます」

「おはよう！昨日は残念だったわね。賢さんの疲れをとってあげたかったのに。でも、ぐっすり寝て今朝はきっと疲れも取れているわね」

「え・・・ええ」

亜希子は賢の部屋に行ったことを口にできなかった。賢はなかなか降りて来なかった。ふたりは茶を飲みながら待った。7時半頃になってやっと賢が現れた。亜希子は賢と目を合わすことができなかった。しかし、おどおどしてはならないと自分を戒めた。賢は祐子の隣に腰掛け亜希子

と斜めに向かい合った。

「おはよう！ふたりとも早いね」

「あら、あなたが遅いのよ。よく寝たから疲れが取れたでしょう？」

「うん、ぐっすり眠れた」

賢は亜希子が部屋に来たことには振れなかった。

「わたしもよく眠れたわ」

賢が手を挙げてウエイトレスを呼んだ。賢と亜希子は洋食、祐子は和食を頼んだ。祐子は地方の産物に興味があった。まもなくテーブルの上に食事が用意された。ウエイトレスはパンとジュース、コーヒー、野菜サラダを賢と亜希子の前に並べると卵の調理方法を聞いた。賢が半熟の目玉焼きを注文すると亜希子も同じものを頼んだ。ウエイトレスが祐子の前に和食の膳を置いた。祐子は自分だけが別の食事を頼んでいるのに少し孤立感を覚えたがそんな思いを打ち消した。祐子は朗らかに話ながら朝食を摂った。亜希子は伏し目がちにしていたが、時々賢の方を見つめ賢と目が合いそうになると慌てて料理に目を移した。

「亜希子、元気がないな。大丈夫か？」

亜希子は顔を赤らめた。

「どうしたの？亜希子さん、本当に元気がないわ」

「わたくしよく眠れなかったのです。少し眠かったのですが、でももう大丈夫です」

「亜希子、身体は大丈夫か？意識ははっきりしているか？」

「はい、大丈夫です」

「今日は昼に鹿島さんに会ってから東京に帰ろう。お父さんに報告しなくてはな」

「父はもうこのことを知っていると思います。一昨日母に電話しておきましたから」

「そうか、それはよかった。それにテレビや新聞で報道しているだろうしね」

「きっとあなたの名前も出ているでしょうし、分かると思うのよ」

「今日は遠野博物館に君たちを案内するよ。特に祐子は興味があるだろう

う」

「この間、あなたが秋田に行っている時、亜希子さんとふたりで行ったわ。随分いろいろな民話集が展示されていたわ」

「ええ、お姉様は民話のことよくご存じなのです。わたくし感心致しました」

「昔は六角牛山ひとつとってみても神秘に包まれていて、そこには天狗や山神が住んでいたのね。今ではドローンなんかを使っても空から写真が写せるから、みんなの認識の中に鳥瞰的な感覚ができていて、奥の深さはこの程度と思うから神秘も失われているみたい」

「本当は今も昔も大して変わらないんだけど、人の意識が変わったんだな。意識が外側に向かって拡散しているから、そこにある本質に気付かなくなってきたら。昔は意識が内側を向いていたから、本質的なものもベールの間からその姿を垣間見ることができたんだと思うよ」

「意識の作用なのですね。わたくし少しずつ分かってきました」

亜希子はそう言いながら賢の目を見た。賢が微笑んだと感じ血が熱くなってくるのを覚えた。祐子は賢の微笑みに気付かなかった。

三人が野岸孝子の教えてくれた弁護士に会ったのは9時半過ぎであった。弁護士事務所は駅から程遠くない市役所の近くにあった。昨日孝子から連絡が入っており、弁護士は機嫌良く三人を迎えた。痩せて長身の神経質そうな男性だった。野岸和也の弁護は成功だったと^{はばか}憚りも無く言い切った。本来なら女性を後方から襲って女性が危害を受けた強盗傷害の場合、10年以上の刑になるはずだとのことだった。刑期が7年で済んだのは弁護士側が和也にあまり強い自己欲が無かった点を強調したためで、それが斟酌されたのだと説明した。状況証拠は全て和也に不利に働いていて、有罪は逃れようがなかったということだった。最も避け難い事実^は和也が現場にいる状態で事件が発覚したこと、凶器のナイフに和也の指紋が残っていたこと、鞆の中に封筒に入った現金があり、その金額が障害を受けた女性の証言する「財布から無くなっていた」という金額に一致していた点だということだった。しかし、弁護士は和也がそのいずれについても否定しない点で極端に不利な立場に立たされた

と言っていた。弁護士の話の中ですっきりしない部分があった。それはどうして和也が障害を受けた女性を庇^{かば}っているのかという点である。賢は野岸和也に会った時、彼が無罪だと直感的に判断したが、どうやら彼が被害者の女性と本当の加害者の両方とも庇^{かば}っているように思えた。賢が考え込んでいるのを見て弁護士が言った。

「野岸和也さんはどうも怨恨や痴情のもつれでこの事件を起こしたのではないようですね。被害者との関係の話になると口を閉ざして一言も証言しませんが、被害者についての話をしたときの冷静さがそれを物語っています。状況証拠についてもそれははっきりさせると被害者が困るだろうと思っているように見えました」

弁護士はキャップをはめたままのペンを手にしてテーブルの上に絵とも字とも言えない意味の無い形を描いている。賢は被害者の女性に会ってみようと思った。

「被害者の女性はどうなったのですか？」

「彼女は背後から腹部を刺されて傷が肝臓に達していましたので、開腹手術をしました。経過が良かったので1ヶ月ほどで退院し、職場に復帰しました。今も花巻市内の元の会社に勤めています」

三人は被害者の女性の勤めている会社の所在地を確認してから弁護士の事務所を後にした。11時10分過ぎだった。駅前の広場の大通りを超えると花巻プラザというこじんまりした店舗街があり、そこにあるペリオンという喫茶店で鹿島康介と待ち合わせるようになっていた。約束の時間までにまだ30分以上あったが、三人はその喫茶店で軽く食事を済ますことにした。店の奥にある機織機が三人の目に飛び込んで来た。誰かがいつも糸を引いている様な感じがして、唯の飾りのようには見えなかった。三人はサンドイッチを注文した。食事を終えても12時までにはまだ20分近く時間があった。しかし、康介は時間前にやって来た。早めに食事を済ますつもりだった康介は三人に気付いて近くまで来た。

「早いね。おれ、一寸飯食うから待っててくれる？」

「僕らも一寸早めに着いたんで、今食事を済ませたところです。一寸、僕らの仲間の亜希子を紹介します」

「藤代亜希子と申します。よろしくお願ひ致します」

「おれ、鹿島康介です。よろしく」

康介は亜希子にちょこっと頭を下げてから、奥に移動して一人で席に着いた。程なく康介が食事を済ませて賢達のいるテーブルに戻って来た。テーブルは4人掛けで祐子と亜希子が並んで座り、祐子と向かい合って賢が座っている。康介は無造作に空いている席に座った。亜希子と向かい合わせになった。康介は亜希子と視線が合うと少し照れ気味に、身体を賢の方に向けた。

「公開会見とはうまい手を使ったすね。報道関係、結構しつこいすからね」

「そうなんですよ。あそこで発表しておけば、後の追跡^{かわ}を躲し易くなると思って思い切ってやったんです。次の日に野岸孝子さんと一緒にご亭主に会いに行ったんです。前日会見が済んでいたから、朝からの報道陣の追跡が無くて助かりましたよ」

「ところで、野岸孝子さんが失踪した時自動車も一緒に消えたよね。エンジンが掛かっていたんだって応えてたよね。それで、帰還した時自動車は元の位置にあって、轍も失踪した時のままに戻って、エンジンが掛かっていたってんだから、もう俺の理解の範囲を超えているっすよ。賢さん、この辺のこと分かるかな。一寸説明してもらえないすか？」

「少し難しいですよ。このことを理解するためには、時間に関する認識を改めないといけないんです。この世界の時間と空間は一体のもので、この空間の事物を認識するときにはいつも時間という概念が附いてくるんです。つまり、時間の経過無しにはこの世界を認識できないんです。認識できないということは、逆に見られても認識されない — つまり、存在できないということなんです。だから、時間の経過無しには我々はこの世界では存在しているとは認められない。それはなぜかと言うと、この世界のあらゆる事物はミクロの場が振動することで形成されるからです。ここで謂う振動というのは時間的に一定の間隔で一定の動きを繰り返すということだから、時間が止まると振動は無くなる。つまり、存在しなくなる。元のみが残る。ということになるのです。ここま

「でいいですか？」

「うん、なんとなく分かったような気がする」

「問題はここからですけど、失踪するという事は、どうやら時間と空間の無い場にシフトすることを意味しているようなのです。ところがその時間と空間の無い場と謂うのは、この3次元世界に重畳して存在しているんです。だから、その空間に移動すると同時にパッと消える。そして消えた時から時間の経過は無いのです。正確にはそういう時間と空間の無い場が在るのではなくて、唯単に状態が変わっただけなんですけどね」

「だけこの世界では時間を経ているんじゃないっすか？」

「それが理解を難しくしているのです。僕らは3次元の世界に生きていて、時間経過の元に存在しているから、時間が無くなった状態は理解できないのです。実際は時間というようなものは何もなく、唯この世界が存在する時に空間と共に現れているだけなのです。映画のフィルムを想像してみてください。フィルムには映像が記録されていて、その映像は各駒が同時に存在しているんだけど、それが映写機で映し出される時スクリーン上では登場人物達が動き廻るでしょう。そして時間と共に変化しているでしょう。でもフィルム自体は時間的には何も変化していません。だから、野岸さんのように失踪した人は皆、スクリーンから抜け出してフィルムに戻っていたんだと思えばいいんです」

賢はこの世界の構造がフォログラフィックなものだという点は説明しなかった。話が複雑になって、誰も理解できないと感じたからだ。

「うん、なかなか説得力あるじゃん。俺にも分かってきました」

「賢さん、とてもよく分かります。わたくしのように科学に疎いものでも理解できます」

亜希子が身を乗り出した。

「だから車のエンジンが掛かった状態で失踪した時、失踪した瞬間の状態に固定されてフィルム上に戻ったようなものなのです。それは物質という一つの固まりで見るとそうなるけど、本当は物質のある状態と物質の無い状態は、単に振動が在るか無いかの差でしかないから本質は同じ

なんです。よく、色即是空、空即是色っていうでしょう。あれは本当のことなんです。だから、更に詳しく見ると、さっき喩えて言った3つの要素 — フィルムとスクリーンと映写機はそれぞれ、真実の実体、その映像が映し出される場、それと映像を映し出す為に働いている力、ということになるのです。フィルムに喩えた真実の実体は理念の様なもの、場はスクリーンに例えたけど、空間と時間を提供する基盤、そして映写機はその場に振動を発生させ、形を創る意志の力ということになるんです。ここまでは理解できましたか？」

「少し難しくなったけど、なんとか分かったす」

「我々が働き掛けて、真実の実体の映像をこの世界に映し出せる様にするということは、何らかの理由で停止していた映写機を動かす様なものなんです。映写機とは真実を写す意志の力だと定義しているから、その意志の力が作用する様に誘導すれば、失踪した人たちは戻って来ることができると考えたんです。そして今のところうまくいっていますね」

「だから帰還した時、時計が失踪した時の時間を指していたんだ」

「そういうことです」

「ということは、俺たちは、単なる映像ということすか？」

「そうです。自分たちが映像ということを知る為には、頭での思考では無理です。何故なら、頭も映像の内の一つの要素、そこで行われる思考も実体が無いのです。だから受想行識亦不如是と観自在菩薩が言ったのです。それは脳が働いて行っているからです」

康介の態度が変わった。高飛車な姿勢が無くなってきた。

「賢さん、それじゃどうすれば本当の自分を知ることができるんすか？」

「僕が思うには僕たちは映像の中にいる。そこからフィルムを知ることは映像自体にはできない。映像の中から抜け出して、映像も映写機も真実の実体も全てを俯瞰するか、または映像の側からフィルム全体が見える様な特殊な映写機に変えるしかないと思うんだ。和尚が「思考を止めて、純粋な気持ちで瞑想しろ」って言っているでしょう。あれは、特殊な映写機を用意する為の行為の様なものだと思うね。実体の無いものに

捕らわれて右往左往しないことだと思うよ」

それを聞いていた祐子が初めて口を開いた。

「あなた、この間、わたくしたちには執着の意識があるからこの世界の写像が在るって言ってなかった？」

「祐子、よく覚えているな。その通りだと思う。今は別の喩えで説明したから、違うことを言っているように思ったかも知れないけど、この間話した執着というのは、歪みのエネルギーを引き起こすことで、ここでの喩えで言うと、映写機がその歪みを作り出しているということだ。さっき言った特殊な映写機というのがつまり、歪みを全く作り出さない映写機ということで、真実がそのまま映し出されるから、視界からこの現象世界の写像は消えてしまって本質だけが残るということになると思うんだ。その時は科学的に見ると、その物体を創り出しているあらゆるミクロ的な振動が止まる。そして、時間も止まり同時に認識される空間も無くなるということになる。時間と空間を生み出す振動を起こす為には歪みが必要で、歪みは執着によって発生するということだ」

「うーん、難しくなってきた。もう理解の限界す」

康介が唸った。祐子は済まなそうに言った。

「ごめんなさい、わたしが余計なことを言ったばかりに、話を難しくしてしまって」

「鹿島さん、失踪の説明はこのくらいにして、一つ野岸孝子さんのご亭主について教えてもらえませんか？それと、青森の事件との関係も」